
英雄伝説 - 刹那の軌跡 -

天魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄伝説 - 刹那の軌跡 -

【Nコード】

N5147Y

【作者名】

天魔

【あらすじ】

キーアは最悪の可能性を感じ取ってしまった

彼女は失われつつ有る、力の欠片を振り絞って願った

- 助けて - と

幸か不幸か、それはある男に届いてしまった

この物語はその男に一通の手紙が届くことで始まる

現実はそのままで甘くはない

それを知りながらも壊そうと藻掻く彼らを面白いと思った

全ては終わりに始まりつつあった……

歌劇の始まり

初めまして、諸君。

いや、お久しぶりといったほうが良いかもしれないな。

私は怪盗B、世間ではそう呼ばれている者だ。

此度、ファルコムから碧の軌跡が発売されました。

もうすでにクリアした方も多いことだろう。

しかし、いくつかの都合が良すぎる点が気になりましたね。

それを少し変えた歌劇を皆様にお見せしたい。

では、その幾つかとはなんなのか？

それは三つございます。

まず一つ目、我らが同志、殲滅天使のことだ。

悲劇にも、この舞台では親代わりだったパテルⅡマテルが壊れてしまった。

ヨシユア曰く、もう直せないとのこと……

彼女の過去から考えるに彼女はとても弱い。

戦闘能力ではなく、心が……だ。

彼女は今まで殻に籠っていたからこそ、耐えてこられたのだ。

それがエステル達によって破られてしまった。

確かに新たに心の拠り所が出来始めていた。

しかし、如何せんパテルⅡマテルほどの奥底までに辿り着くには

少しばかり時間が足りなかった。

そこに辿り着くまでにパテルⅡマテルが壊れてしまった。

彼女は最大の心の拠り所がなくなったことで今まで耐えてきたモノを守るものがなくなってしまう。

それで起こったことは彼女の精神崩壊……

彼女は所謂廃人となってしまった。

次に二つ目、熊髭先生ことイアン先生だ。

最後の最後にロイドに説得されてキアに話しかけたところでマリアベルに攻撃されてしまった。

ここで気になるところがある。

確かに彼女の攻撃は仮死状態にただけかもしれない。

しかし、その後の手当が遅すぎる。

あれほど遅くなってしまうては血を失いすぎて、死んでしまう可能性のほうが高すぎる。

助かったとしても目が覚める可能性はかなり低く、仮に目覚めるとしてもかなり遅くなるだろう。

普通に考えて、帝国からのクロスベル解放にはまず間に合わないともいいだろう。

最後に三つ目、アルカンシエルの最大の目玉、イリア・プラティエだ。

彼女はリハビリを経て、再び舞台の上に立つことが出来た。

いやはや、素晴らしいの一言だ。

事実は小説よりも奇なり……正にこれを体現する。

しかし、現実というものはそこまで甘くはない。

コレに付いては長くなるので本編で……

これから語る物語はこの三つの可能性を因果を弄ぶ力を失いかけたキアが知覚してしまったことから始まる。

この三つを感じた彼女はそれではまたロイドたちがとても悲しみにくれてしまうということから、最後の欠片を振り絞って願ってしまう。

- 助けてーと……

それを感じ取ったのはこれまた面白く、私の親友であった。

彼もまた、私とは近くて遠い美的センスを持っていて、互いに高め合う同志だ。

あのオリビエの様にライバルではなく、友でもない。

奇妙な関係だが、私は彼にとっても惹かれている。

そして、彼が魔都クロスベルに行く理由は、私の一通の手紙が原因だ。

さてさて、長話はコレくらいとして、物語を始めようか。

それでは皆様、この物語が良きものであると願って……

縁がございましたら舞台の上でまた会いましょう。

それでは皆様、御鑑賞下さいませ……

歌劇の始まり（後書き）

設定の三つに関しては次回で詳しく書いていく予定です

一つ一話程度になる予定です

更新は二月に一度の予定です？

調子に乗ればもっと早いかも

終わりに始まりへ・前編・（前書き）

レンに関してはファルコムの設定であるので楽でした
熊髭さんは描くこと少ないからイリアと混ぜる予定で
す
イリアはやたら長くなりそうなんだですけどね

終わりから始まりへ - 前編 -

全ては終わりから始まっていた。

「えッ……？」

「どうしたんだ、キア？」

樹が崩壊する寸前、キアは感じ取ってしまった。

このままでは訪れてしまう悲劇。

それを視てしまい、それはもう既に手遅れなのを理解してしまった。
一つ目はレンを襲う悲劇、二つ目は先程目の前で仮死状態にされてしまったイアン、三つ目はイリア……

「そんな……、なんで今更ツツツ！？」

「キアッ！？」

かつてロイド達が死ぬことを知った時と同じくらいの悲しみがキアの心に溢れた。

それは先程まで明るく希望に満ちていたこの空間が一瞬でそれが塗りつぶしてしまった。

「そんなダメ！？」

だ……れ……か……

誰……か……

誰か、助けてッツ！！」

力は既になくなりかけていることも承知でキアは願ってしまった。

否、それを考えることすらなく、只々願ってしまった。

その反作用で何が起きるかも分からないままに。

そしてそれは幸か不幸か届いてしまった。
因果を弄ぶ力を持った幼き少女の願いは届いてしまったのだ。
これからどうなるかも解らない儘……

「……たくっ、ガキは脳天気な顔して笑ってりや良いんだよ。
好きなだけ泣け、笑え、怒れ、子供ってのはそういうものだ。
小難しいことは大人に全部任せてたら良いんだよ……
だから……難しいことは俺に任せろ……な？
さあ、最後は俺だけのソロステージだ」

一つ目の悲劇は、パテルⅡマテルが壊れてしまったことだ。
ヨシユア曰く、もう直せないとのこと……
彼女の過去から考えるに彼女はとても弱い。
戦闘能力ではなく、心が……だ。
彼女は今まで殻に籠っていたからこそ、耐えてこられたのだ。
その殻は、レンがかつて『楽園』と呼ばれていた場所にいた時に作られたものだ。
『楽園』はペドフィリアに対する売春をする施設だった。
そこにはレンと数人の仲間たちがいた。

？リーダーの『クロス』

？好奇心旺盛の女の子・エツタ

？可憐で大人びた女の子・アジュ

？いつも殴られている男の子・カトル

？お姫様の『レン』

それ以外にもいたがレンは『どうでもいい』と思っていた。

しかし、お姫様である『レン』には仕事が出来ませんでした。

他の子達が痩せ細ろえていく中、自分だけはおいしいものを食べ、お人形で遊んでいれば良かった。

何故、レンには仕事が出来なかったのか……？

その理由を彼女は『特別だから』と言い、周囲の子供達も『レン』が喜んでくれればそれでいい、と口にしていた。

普通に考えれば一人だけ苦痛を味わわないなんて理不尽が子供たちに我慢できるわけがない。

けれど、次第に他の子供達は段々と消えていきました。

ある日、『レン』は『クロス』に問いました。

「他の子達は何処に行ったの？」と……

それに対して『クロス』の返答はこうだった。

「ここは元々、僕とレンだけの世界だ」

さらに『クロス』は続けて言う。

「他のみんなはすぐに殺しちゃったくせに。
なんで僕だけ生かしておくんだ」

それは『クロス』が疲れていからだった。
他のみんながいなくなったから疲れているのだ。
クロスが疲れているから、他のみんなが消えた。

《身喰らう蛇》は崇高ではない無粋な組織を潰す事がある。

今回の対象は『楽園』だった。

その時やって来たレーヴェは『クロス』の体にある無数の十字傷を見て言った。

この無数の『クロス』は自分で傷つけたものだ。
自我を保つためにやったのだ、と。

つまり、クロスとは『レン』という人格を守るためにつけた傷の事。
他の仲間とは、レンが持つ人格の事なのです。
本当に別の子供がいたわけではなかったのです。

客から様々な注文を付けられ、多くの嗜好に合わせなければならなかった。

その中で、本当の『レン』を守るために、生まれた人格があの人。

どの人格も彼女の一部である。

本当の『レン』という人格は、彼女が自我を保つために、クロスを始め、4人の子供達を生み出し、演じました。

そうする事で自分を守るしかなかった。

『クロス』がリーダーだったのは、傷を刻む事がもつとも彼女を保つ術だった。

しかし、その最後の人格さえも壊れてしまう時が来た。

もう彼女を守る人格など存在していない。

そして本当の『レン』さえも傷付いてしまう前に身喰らう蛇が『楽園』を壊しに来た。

その後の『レン』は執行者となり、執行者としてとても優秀だった。
天才であった彼女は、また別の道を見つけたのに、それでも本当の自分ではなかった。

同じように自我を守る偽りの自分を作り出したのだ。

しかし、不幸なことに優れすぎていたからこそ、それは周囲に認められてしまった。

だから彼女の心は全く強くはない。

今までずっと目を逸らし、逃げ続けてきたのだから……

だが、その執行者の『レン』をエステルに壊されてしまった。
エステルならば本当のレンを救うことは出来るだろう。

ヨシユアを救ったように。

太陽のように照らすことで、きっと救えるはず——だった。

しかし、すでに縁^{よすが}となっていたパテルⅡマテルが壊れてしまった。

まだ、心が強くなっていないレンにとってこの衝撃はとてつもなく大きすぎた。

本当のレンはそれに耐えられはしなかったのだ。

今しばらく、時間があれば何とかあったかもしれないが……

それに耐えられなかったレンはまともな受け答えどころか、食事すらまともに喉を通らなくなってしまった。

日に日に衰弱していくレン。

それを世話するエステル達もとても悲しんでいた。

キーアはこの光景を視てしまった……

ロイドたちを助けるために勝手に呼び寄せた……

自分の我侭で振り回してしまったから、彼女はパテルⅡマテルは壊れてしまい、レンは廃人へとなってしまった……

キーアはその事実を視てしまった。

だからこそこの未来を認めたくなかった。

だから、願ってしまった

終わりから始まりへ - 後編 -

キーアが知覚した二つ目の悲劇はイアン先生だった。

彼は先程キーアの目の前でマリアベルに攻撃された。

確かに彼女は仮死状態にただけだったかもしれない。

しかし、攻撃の衝撃でそれなりの速度で柱に叩き付けられ、内蔵も幾つか壊れてしまっているだろうということは容易に想像できるだろう。

果たして、それだけの重症を負いながら、明らかに遅い手当で命を取り留められるのか？

どう考えても答えはNOである。

仮に命だけは助かったとしても、目が覚める可能性は極めて低い。

しかし、この事件の後でクロスベルを襲う悲劇。

帝国の侵略に抵抗するにはイアンの力は必要不可欠だ。

ロイドたちの性格などから鑑みるに、帝国に抵抗するのは必至。

そこで彼の力が欠けた状態では唯でさえ、分が悪すぎる彼らが命を落とす可能性は高くなるだろう。

仮にそうなってしまうてからでは遅すぎる。

その時にはもうキーアの因果を弄ぶ力はなくなっているのだ。

- もうあの時の悲しみを味わいたくない

その一心でキーアは切に願った。

この要因が彼女に幸せを願う気持ちを強くさせた。

三つ目の悲劇はイリア・プラティエ。

アルカンシエルの花形スターである彼女。

太陽のような彼女は多くの人を魅了した。

舞台の上では勿論、プライベートの時でもその性格や行動で様々な人を惹きつけた。

しかし、彼女はイエーガーのクロスベル襲撃で重症を負ってしまう。脚に関してはもう動くことすら怪しい。

それでも彼女は決して諦めなかった。

リハビリは大きな苦痛を耐え忍び、それでも懸命に真っ直ぐに突き進む彼女の姿は周りからは輝いて見えたことだろう。

そして、念願のリハビリの成果でウルスラ病院の医師によって脚が回復したことを告げられた。

それから彼女は今までの時間を取り戻すかのように舞台上で練習を重ねた。

その姿を見ていたリーシャも安堵していた。

リーシャは自分がいたからシャーリイがアルカンシエルを襲撃したと思っていた。

だが、事実はそうではなく、彼女がいなかった所でイエーガーはアルカンシエルを襲撃しただろう。

そして、練習に練習を重ねたイリアは遂に公演の舞台上上がる。

しかし、ここで悲劇に襲われた。

イリアが舞台上上がることが確定したことにより、新聞社によって大々的に取り上げられることになった。

クロスベルの中でイリアを知らぬものは居らず、誰もが彼女に魅了されていた。

その彼女が襲撃によって重症を負い、リハビリを経て、再び舞台上上がる。

これほど人々を騒ぎ立てるモノはないだろう。

リハビリをしている間も何かと彼女の記事が多く書かれていた。

中には『イリア、再起不能か！？』等といったゴシップ記事が大いに出回った。

時の人である彼女の行動はクロスベル全体に大きく影響を及ぼしていた。

そして遂にその復活劇のクライマックスに悲劇は起きた。

復帰最初の公演のクライマックスだった。

彼女は突如、膝をついた。

その行動に誰もが呆気にとられ、目を疑った。

そしてそのまま、彼女は倒れ、会場は沈黙に支配された。

誰もが願わず、信じられないことが起こったのだ。

その日はそのまま幕が降り、イリアは再び病院に行く羽目になった。そして精密検査の結果、イリア・プラティエは再起不能を申告された。

この日以来、彼女は自分の脚で立つことすら出来なくなってしまった。

それはクロスベルに大きな影響を与えた。

イリアはクロスベルにとって大きな希望だったのだ。

グノーシスの薬物事件、イエーガーの襲撃、クロイス家の野望、そしてデーター大統領による独立宣言。

これら全ての事件がクロスベルに大きな影響を与え、未だに修復すら儘ならない状況での、帝国の侵略。

その絶望の中でのイリアは正しく希望だったのだ。

その希望が瞬く間に絶望へと変わった。

太陽な彼女が一瞬で沈んでしまったのだ。

明けない夜が無いように、沈まない朝もないのだ。

そして、此度の朝は短すぎて、さらに深い夜を呼んでしまった。

一瞬の煌きはさらに深い闇を演出するだけに終ってしまったのだ。

一度でも……

たった一度でも公演が成功していたならば、それは希望になったかもしれないが、それは果たされぬままに、より印象的な絶望を植えつけただけだった。

イリアの脚が、まだ少しでも動くならば状況が変わったかもしれないが、微塵も動かすことが出来なかったのだ。

クロスベルは希望から一転、絶望の底へと落とされたのだ。

そして、この事件で一番影響を受けたのは他ならぬリーシャだった。彼女はイリアに対して後ろめたく思っていた。

自分の存在が、『銀』という存在が災い呼んでしまったのだと思っていた。

そして、その数日後、リーシャはクロスベルから姿を消した。

彼女はやつと見出した光の道を自らの意志で閉じたのだ。

『銀』へと、復讐の道へと堕ちていったのだ。

それから『銀』の名は裏世界に轟き始めた。

より残忍、より残酷な殺し方を始めた『銀』

裏世界でその名を知らぬものとなり、大いに恐怖を与えた。

リーシャの失踪はすぐさまイリアに告げられて、それを聞いた彼女は一言だけ呟いた。

「今、あの娘は何処で何やってるのかしらね……」

その呟いた姿は普段からの彼女からは想像できず、何処か寂しげな姿だったという。

キーアは知覚してしまった。

この大いなる絶望を、誰もが包まれる絶望を。故に彼女は願った。

この絶望を希望へと変える可能性を……

終わりに始まりへ - 後編 - (後書き)

これedyouやく本編へと入れます

それにしても結構削っちゃいました

無駄に長く書いても変になってしまいましたので……

もうすこし表現がうまくなりたいです

機械仕掛けの銀細工（前書き）

時間的には零の軌跡の内容になります
これから一気に時間が飛ぶ可能性もあるのでご容赦を

機械仕掛けの銀細工

帝国との国境の境に設置されたベルガート門と呼ばれる関所。

「漸く着いたか」

そこを通り、クロスベルへと向かうと思われる男がいた。
帝国からクロスベルへ入ろうと、今まで乗ってきた物から降りて窓
口へと歩いた。

通門審査票に書き込み、窓口嬢へと手渡す。

「お名前はアルクエイド・ヴァンガードさんですね？」

「ああ」

「通門目的は帰宅……」

場所は……ローゼンベルグ工房？」

「何か問題でもあるか？」

帰る場所に首を傾げられた事に、疑問を持ち訪ね返す。

「い、いえ……」

あの、あなたが人形作りで有名な人なんですか？」

少し狼狽えながら、窓口嬢は目の前の男へ聞く。

クロスベルのローゼンベルグ工房と言えば誰もが知るほど有名だ。
アンティーク人形で有名な人物がそこにいるという噂だ。

そこで作られた人形はマニアが桁外れなミラを出して欲しいがるとい

う。

そこに帰るとなると聞きたくなることだろう。

そうでなくとも彼女は警備隊の一員だ。

目の前にサングラスをして、黒い生地に深紅の歯車の刺繍がされたコートを着ている男がいたら不信に思い、話しかけるのは当然だろう。

「違う」

「そ、そうですか、しつ失礼しました」

冷たく否定された言葉に彼女は慌てて頭を下げる。

「もう通つても良いか？」

「はっはい、どうぞ！」

アルクエイドはそれを聞くとここまで乗ってきた物に戻っていった。乗り物に近づいて行くと恐らくそれが有る場所を中心に人の円が出来ていた。

・また何時ものことか

それを煩わしく思いながらも戸惑いなく歩いていく。

そこに集まっている人を掻き分けながら歩む。

「人の物に纏わり付かないでくれないか？」

「これはあなたの物ですか？」

乗り物の場所まで行くと一人の警備服を着た少女が立っていた。

「そうだが、それが何か？」

「あなたのコレは何でしょうか？」

一見、タイヤが有ることから乗用車の一つだと思つのですがこういう形は見たことないです」

「オーバーサイクル魔導二輪車マウドニリンシャって言う、まあ車的一种だな。

二輪車だから色々面倒だが、その分便利ではある」

「いえ、そういう意味ではなくて……」

「ああ、法律上の問題か？」

一応一般乗用車として登録もしてあるし規律も守っている」

「そうですか、それは失礼しました」

それを警備隊の少女は敬礼して謝罪をする。

「気にしないでくれ、いつものことだ。

……あー、えーっと……」

「私はノエル・シーカーといいます。
階級は曹長です」

「と言う訳だ、曹長。

もう行ってもいいか？」

「はい、結構です」

アルクエイドはオーバーサイクルに跨ってエンジンをかけた。
一定のエンジンの駆動音と心地良い振動がアルクエイドの体に伝わっていく。

「ああ、そうだ、余計な手間をかけた手間賃だ。
二つ渡すから、窓口の奴にも一つ渡しておいてくれ」

そう言つてアルクエイドは、腰に付けたバッグから無造作に丸い銀色の物を二つノエルに投げ渡した。
同じ物が幾つもの入っているのか、手を入れた時にガチャガチャと音がした。

ノエルが慌てて受け取るのを見ると一気に加速して瞬く間に姿が小さくなっていった。

「彼は一体誰なのでしょう？」

ノエルは突然の行動にも驚きながら、その後姿を見送った。
彼の姿が見えなくなるまで茫然としていた。
彼女は手元にある、先ほど投げ渡された物を見るとすぐさま驚愕した。

「えっ!？」

コレって……」

銀のチェーンに結ばれたそれはある機械だった。
そこに刻まれた盾と翼を組み合わされた紋章の上にVの文字。
これは世界で有名な銀細工のエンブレムだった。
それは誰が造っているのか、どこに住んで居るのかさえ謎に包まれた作品だった。

ある時は裏社会のオークションで、ある時は田舎町の露天商の中に……
売られている場所すらも不特定で、出品者は知らない奴から買った
と言う。

オークションではその国の大物だったり、露天商では前から居た浮
浪者や捨て子から買ったという。

作られた物は様々で、何かの像であったり、時計だったり、アクセ
サリーだったりする。

有名な芸術作品はある種の法則性が必ず存在する。

絵ならば書く対象、細工ならば造る種類といった風に。

それは各個人の誇りや求める物が起因するからだ。

こういう天才と呼ばれる狂人は、何かを極めることで産まれる。

その何かに重点、誇りとして揺るぎない物が存在するからだ。

故にそれを根底に置いた統一性があるはずなのだ。

しかし、これは何も統一性が無いのだ。

敢えて法則性を上げるならば素材が銀と言うことだけ。

何故制作者が個人だと分かった理由は全ての品に小さい深紅の歯車
とその上にAと刻まれていたからだ。

そして、一番の謎はどうしてそれが有名になったのか……だ。

それはこのエンブレムを刻まれた最初の品が原因だった。

最初の品は5年前にある捨て子が質の悪い商品に売ったことが始ま
りだった。

その捨て子がある日、目覚めるとその紋章が刻まれたペンダントを
握っていた。

それを見た捨て子は、ある優しい人が価値ある物をくれたのだと喜
んだ。

その捨て子は大はしゃぎで近くで開いている露天商に売りにいった。

その露天商は物を見る目があつたのか、捨て子の持っているペンダントがとても価値ある物だと思った。

しかし、意地悪な露天商は数十ミラで捨て子から買い取った。

思った程ではないと思つた捨て子だったが、数十ミラも渡されると駆け足で去っていった。

それにほくそ笑んだ露天商はそれを数万ミラで売りに出した。

しかし、流石に高すぎたのか、その日はそれは売れなかった。

少ししよぼくれながらも帰つた露天商だったが、次の日から現れなくなつた。

数日後、不思議に思つた捨て子は、人に聞いてみるとペンダントを売つた次の日にバラバラ死体で見つかつたという。

それに驚いた捨て子だったが、次の日目覚めると、手に死んだ露天商に売つたはずのペンダントがあつた。

また誰かがくれたと思つた捨て子は売ろうとしたが、あの露天商は既にいなくなっている。

仕方なく、捨て子はペンダントを首からかけながら街を歩いていた。すると、捨て子は老婆から声をかけられた。

「坊や、良いペンダントをしておるね。

それを売つては貰えぬかの？」

声をかけてきた老婆は街で有名な人で、アクセサリーを集めるのが趣味で世界中から集めていると噂だった。

捨て子は喜んで売ると数万ミラも手渡された。

ペンダントがそれ以上の価値があると見た老婆は捨て子を遠い町の孤児院に連れて行つた。

孤児院に連れて行かれた捨て子は今もその老婆と交流を保ちながら、孤児院で暮らしている。

それ以降、度々世界にそのエンブレムの品が至る所に出回り始めた。その品々はわざと価格を低く買うと購買者が謎の死を迎えることが幾度も起きた。

その品々は曰わく品として世に出回った。

裏社会のオークションで売られている理由はそれだった。

芸術作品としても価値が高いとされるそれらは、買うものが後を絶たない。

そして今から3年前に表社会にも出回り始めた。

それはアクセサリーなどの小物を主に、IBCが売り始めたのだ。

それも子供のお小遣いで買える値段でだ。

これは裏社会に大きな影響を与えた。

普通の品が世界に出回ったことで曰わく品の価値が下がったのだ。

それを原因に世界中の有名人が制作者を捜したが何も情報が得れなかったのだった。

そして本の1ヶ月前にまた新たな品が出回った。

それは魔導動物オーバーペットと呼ばれる電子ペットだった。

銀時計サイズの細工で開くとモニターとスイッチが数個ある。

モニター内で好きな動物が飼えるという物だった。

これは特に女性に大いに売れた。

10種類のタイプがあり、それぞれ飼えるものが違う。

一つのタイプに3種類のペットが飼える。

しかし、これは数がとても少なく、一番人気のタイプは数十万ミラで取り引きされている。

ノエルの受け取った銀細工はそれだった。

「銀の翼と盾、それに深紅の歯車……」

それに、これはオーバーペットの一番人気タイプ!?

間違いなく本物のアルゲントウム製品!

本当に何者……？」

軽く投げ渡されたそれを落とさないように気を付けながらもアルク
エイドが消えた方角を眺めていた。

四肢の魔獣事件を調べている特務支援課。

その四人はマインツへと向かう途中にあるローゼンベルグ工房前へと着いていた。

「ローゼンベルグ工房……？」

「ああ、此处が……」

がっちりと閉められた鉄の柵に提げられている看板の文字を読むと
エリイが納得するように呟いた。

「あら、お兄さんたちだあれ？」

彼らの後ろにスマイレ色をした髪のコシック調のドレスを来た少女が
立っていた。

「君は？」

「あら、レディの名前を聞くときはまず自分から名乗るものよ？」

「ははっ、意外にませているじゃないか、お嬢ちゃん」

「こちらランディ、俺はロイド」

「エリィよ、よろしくね」

ロイドの自己紹介を皮切りに次々と名を名乗る。

「レンよ、よろしくね」

レンはドレスの裾を軽く摘み上げてお辞儀をする。

ロイドたちはレンに最近起こっている魔獣事件について聞いてみたが此処に来たばかりで何も知らないとのこと。

工房の主も居ないことをレンは言々とロイド達は立ち去ることに決めた。

「それじゃ、何かあったらいつでも頼ってくれよ?」

「じゃあ、早速だけど、聞いてもいいかしら?」

ロイドの言葉にレンは訪ねてみた。

「空のように蒼い髪と海のように深い青の目をしたお兄さんを知らないかしら?」

「いや、知らないな……
皆は知っているか?」

「いや、俺も知らねえな」

「私もよ」

「……私です」

「蒼い髪ってティオ助みたいな色なのか？」

「いえ、もうちょっと濃い色よ。」

色々が目立つ人だから知っていると思ったのだけど……」

「君のお兄さんかい？」

「いいえ、でもそんな感じがしら」

兄と言われてくすくすと可笑しそうにレンは笑う。

「お兄さんたちが知らないならまだ帰って来てないのかも」

「一人で大丈夫なの？」

「大丈夫よ、レンはお姉さんだから一人でお留守番出来るわ。それじゃあね、支援課のお兄さんたち」

そう言っつてレンは鉄門を潜って行った。

レンが通ると門は独りでに閉まってしまった。

「なあ、俺たちって支援課のこと言ってないよな」

「あっ」

「クロスベルタイムズを読んで知ってたんじゃないのか？」

「そうなのかもね」

「それにしても蒼い髪ですか……」

「お、ティオ助、気になってるのか？」

ランディが何処かニヤニヤとした顔でティオに尋ねる。

「いえ、自分と同じ髪色と言われて気になっただけです。

決して、ランディさんが想像したようなことはありません」

彼らは和気藹々と談笑しながら分かれ道へと降りていった。

西クロスベル街道から市内を通り、マインツ山道を通る。

その途中に現れる魔獣たちを旨く避けながら道を突き進むオーバーサイクル。

「この辺も大分整備されたな」

今ではバスも通る道は完璧に石畳へと整備されている。

土のように大きな振動にならずに細かい振動がアルクエイドの体に快い揺れを与える。

途中、クロスベル市内の整備のされ方はやや異常とアルクエイドは思った。

他の国を見てきたからこそ、何か違和感を感じていた。

「まあ、俺には関係ないか。」

「そついや、今はクソジジイが居ないんだっけか……」

山の中腹に来た辺りでローゼンベルグ工房の方から四人組が歩いてくるのが見えた。

「ん？」

「うちの客にあんな奴らいたか？
アルカンシエルの新人か？」

ローゼンブルグはクロスベルの劇場の機械の作成から調整まで受け持っている。
その関係あるとアルクエイドは思った。

「なあ、君たち。」

「うちに何か用事か？」

アルクエイドは丁度全ての階段を降りてきたロイドたちに話しかけた。

「はい？」

「今ローゼンブルグから歩いてきただろう？」

「そうですね……」

「おい、なんだこれは？」

「分かりません、乗用車のように走って来ましたけど……」

ランディとティオがアルクエイドのオーバーサイクルに興味を示した。

「空のように蒼い髪に海のように深い青の目……
レンちゃんの言っていた人かしら？」

「レンを知っているのか？」

「ええ、先程工房前で会いました」

それを聞くとアルクエイドはオーバーサイクルのハンドルの下に嵌っている何かを弄り出した。

「はい、何かしら？」

するとそこから先程ロイドたちが出会ったレンの声がした。

「帰っているなら連絡しろって俺が言えた立場じゃないな」

「その通りよ、分かっているじゃない。
それよりも早く帰ってきてもらえないかしら？
もう3日も待っているのだけれど……」

「ちっ、もういい、すぐ行く」

「早くしてね。」

そうそう、近くにいる支援課のお兄さんたちにお礼を言っておいて

それを告げるとレンの声はしなくなった。

「だ、そうだ」

「えっと、今のは……？」

「通信機を使った通話だが？」

「いえ、そういう意味じゃなくて……」

「なあなあ、それよりもよ。」

兄さんが乗っているそれを教えてくれよ」

「そうですね、私も気になります。」

こんなの見たことがあります」

ランディとティオは目を輝かせていた。

「オーバーサイクルだ。」

また後で工房に来るといい。

その時に詳しく解説してやろう。

今は五月蠅い娘が待っているのですね」

「あのませた嬢ちゃんか」

「分かりました、明日にでも早速寄らせていただきます」

ランディ、ティオだけでなくロイドたちも目の前のモノに興味津々だったが、今は事件を追っていることを忘れてはいなかった。事件を優先させるために彼らは再びマインツへと向かい始めた。

「支援課……特務支援課か……」

Bが興味を持った1つか。

一人、いや二人か。

赤毛ともう一人、血の臭いがするな。

ロイド・バニングス、リベールの時の奴に比べると分かり難いな。

まあ、アレは馬鹿みたいに分り易すぎただけか」

彼らの後ろ姿を見ながらアルクエイドは苦笑した。

再び、エンジンをかけるとオーバーサイクルは階段を物ともせずに登り始めた。

機械仕掛けの銀細工（後書き）

魔導二輪車と魔導動物ですが、これはエニグマの動力を内包している設定です

魔導動物の動力はクォーツで言う機功の効果を内包してあるものが使われており、半永久的に使えるようにしてあります

機械仕掛けのお人形（前書き）

自分でも驚くほどの執筆速度

その分脱字誤字が多いかもしれませんが見つけ次第随時直していきます

機械仕掛けのお人形

「いやあゝ、あのオーバーサイクルって奴は格好良かったなあゝ」

ロイドたちはアルクエイドと分かれた後も彼が乗っていたオーバーサイクルに花を咲かせていた。

「それにしてもアレは何処で作られたのでしょうか？
エンジンの小型化はまだ何処も成功していないはずです」

「あの工房なんじゃないのか？
あそこの関係者みたいだし」

「案外そうかもしれないわね。
あの工房は何を作っているのか、良く分かってないみたいだし……
もしかしたら、あのアルゲントウム製品もあそこで作られている
のかもしれないわね」

「アルゲントウムってあのオーバーペットのか。
でもあれはIBCが作っているんじゃないのか？」

「いえ、確かにIBCが売り出していますが、私はアレがあのビルで作られているのを見たことはありません」

「それにあの人、何処かで見たことがあるような……」

ロイドたちが会話している間に途中にあるトンネルを抜けた時だった。

狼の遠吠えが辺りに響き渡った。

「ッッ!？」

「近いぞ！」

「彼処です」

ティオが崖上を指差す。

その先には蒼と白の毛並みを持つ狼がいた。

その狼はロイドたちを値踏みする目で見詰めていた。

「ウォン……ウーウルル」

敵対心もなく暫く唸るように吠えろと崖の上へと跳び登っていった。

「え、えっと……」

「彼が言うには『最後の欠片はこの先に後はお前たち次第だ』そうです」

「言葉が分かるのか、ティオ助？」

「ニュアンスだけです……」

「私たちが知らない何かがあるということね」

「そのようだ、みんなあと少しだ、行くぞ！」

「」「」
「」

階段を物ともせず、オーバーサイクルで登り切ると自動で開いた門と工房の扉を確認すると乗ったまま入っていった。
そのまま室内を走り、ある部屋に入り、止めた。

「お帰りなさい、マキナ」

「そつちで呼ぶんじゃない」

その部屋の片隅にある端末でレンがかなりの速さでキーボードを叩いていた。

その反対側には異常な大きさの機械で出来た人形があった。

「で、何しに帰って来たんだ？」

「お爺さんにパテルⅡマテルをメンテして欲しかったのよ。
あなたが代わりにしてくれないかしら？」

「一応、俺の分野外なんだがな……
マイスターは何処に出掛けてるんだ？」

「知らないわ。」

というよりもそこは養子であるあなたの方が詳しいはずじゃない」

「養子と言われてもな」

レンと会話しながらもアルクエイドは近くにぶら下がっている工具一式が入っているベルトバッグを掴むとパテルⅡマテルが固定している鉄鋼を登る。

「久しぶりだな、パテルⅡマテル」

アルクエイドが巨大人形に話しかけると目の部分が点滅し、音声暗号が鳴る。

パテルⅡマテルの装甲や関節などの隙間を確かめ、動力源や配線を確認する。

最後に噴射口を覗いた時にアルクエイドはレンに向き直った。

「お前、一体コイツに何させたよ。」

問題は色々あるが、特に噴射口だ。

どれくらい長距離移動させた？」

「別に、ただ半年くらい飛び回ってただけよ」

半年と聞いてアルクエイドは頬を引き攣らせた。

「無茶させすぎだ、ド阿呆！」

アルクエイドが怒鳴ってもレンは素知らぬ顔で端末で何処かにアクセスし続けている。

「たくつ、せつかくパテルⅡマテル用に作っていた物があるがこれじゃ渡せないな」

「あら、パテル〓マテルの為って何を作ったのかしら？」

「まだ途中だ。」

それにもう少し丁寧に扱わないと渡せないからな」

パテル〓マテルの噴射口に工具を突っ込みながらアルクェイドは言う。

渡せないという言葉にレンは可愛く頬を膨らませる。

「もう、いけずね」

「なんとでも言え」

言い争いをしているように見えなくもない二人にパテル〓マテルが幾分先ほどもよりトーンが低い音声を鳴らす。

「大丈夫よ、別に喧嘩しているわけじゃないわ」

レンの言葉に答えるようにパテル〓マテルも音声を鳴らす。

「パテル〓マテルはレンに甘すぎだ。」

ちゃんと叱ることも覚えろよ」

「私はそこまで子供じゃないわ。
もう立派なレディよ」

端末に向かっていたレンはアルクェイドの方に向くと後髪を掻き上げて髪を風で靡かされているように見せる。

「はん、もう少し体に凹凸が出来てから言っんだな」

アルクエイドはそんなレンを横目でちらっと見ながら鼻で笑う。

「あら、そんな脂肪が合っても邪魔になるだけじゃない。
そんなモノよりも若さが一番じゃない」

そう言ってレンはいつの間にかアルクエイドの背後に移動していて、耳に囁いた。

「はいはい、そう言うことするのは嫌いなんだろ。
それはあのエステルとか言う、うざい女にしてやるんだな」

アルクエイドは立ち上がってレンの首根っこを掴み上げ、そう言う
と先程までレンが座っていた端末前の椅子の方に投げる。
投げられたレンはまるで猫の様に空中で二三回回転すると足からち
やんと着地した。

「もう、レディの扱いがなってないわよ。
相変わらず乙女心に鈍いのね」

「あーはいはい、鈍くて結構。
俺は物作ってたらそれで十分だ」

アルクエイドは噴射口のメンテが終わったのか近くにある色々なも
のが乱雑に置かれている机に歩み寄った。

その机の上からエニグマに似た物体を掴むとパテルⅡマテルに登り
だした。

パテルⅡマテルの顔近くまで来ると、首の横にあるハッチを開けて
それと配線を幾つか繋ぎだした。

繋ぎ終わるとそれごと戻してハッチを閉めた。

「レン、お前のエニグマを貸してくれ」

「エニグマって新しい方？」

「それとも古いほうかしら？」

「ペットの方だ」

レンのエニグマは普通に警察や遊撃士に配布されている通信やアイツ用のエニグマだけでなく、アルクエイドがそれに加えてオーバーペットの機能を加えたエニグマⅡMを持っているのだ。

アルクエイドはパテルⅡマテルの肩から飛び降りてレンが取り出したエニグマⅡMを掴むと、オーバーサイクルに引っ掛けられている最初に彼が持っていたバッグに手をつ込む。

そこから携帯用端末を取り出すとエニグマⅡMと繋ぐ。

「何を入れるのかしら？」

気になったレンはモニターを覗くとパテルⅡマテルのパラメータが表示されていた。

アルクエイドがソフトを起動させるとすぐさまパーセンテージバーが現れて物の数十秒で100%と表示された。

アルクエイドはエニグマⅡMを外すとレンに手渡した。

「通信機能の所を開けてみな」

「これは……」

言われた通りに通信機能を起動すると選択肢が現れて、そこにPⅡ

Mと表記された物があつた。

今まで見たことがない物を選択してみるとモニターにパテル＝マテルの顔が現れた。

パテル＝マテルが音声を発するとモニターに文字が現れた。

「電波が届いているところならそいつがあれば何処でもパテル＝マテルと会話できるようになる」

「すごいわ、これでいつでもパテル＝マテルとお話できるわ」

「後、その状態で少しかり消耗が激しいがチェス、トランプなどのミニゲームも出来るようにしておいた」

「ありがとう！

アル、大好きよ！」

「うおっ！？」

レンは笑顔で横に立っていたアルクェイドに飛びついた。
いきなりすることに驚いてレンが飛びついてきた衝撃で少し蹣跚うろたけた

「ほらほら、気軽に男に飛びついたりしない」

アルクェイドは首に回された腕を掴んでレンを抱き抱えると、腕を外してゆっくりと下ろした。

「ところでお前はネットで何してんだ？」

「クロスベルで面白い子を見つけたのよ」

他にも色々面白いことになっているみたいよとレンは言う。

「それよりもどうして急に帰って来ることにしたの？」

「ああ、Bから手紙が来たからな。

読んでみたら、クロスベルでリベールの時の様に面白いモノを見つけたとき」

「相変わらずブルブランとは仲がいいのね。

それで彼が来るなら分かるけど、なんでアルが来たの？」

「私が我が姫君を見つけたように、親友である君の姫君が見つかると思うよって書いてやがったんだよ」

アルクエイドは親友の気障な言い回しに肩を竦ませながら言った。

機械仕掛けのお人形（後書き）

次回で漸く手紙が出せます
長い序章です

Bからの手紙（前書き）

これによつやく序章が終わりです

Bからの手紙

- 助けて -

空高く、空気を切り裂くような速度で鷹が飛行している。

口に紙切れを咥えたまま幾つもの山を超えて飛び続けている。

鷹は帝国内の山の山頂付近に存在している小屋を目指して降下し始めた。

辺りは既に暗くなっており、本来鳥目でまともに飛ぶことが出来ない筈の夜をその鷹は飛んでいる。

小屋が見えるところまで来ると鷹は一鳴きしてから上部にある円形の切り抜かれた空間から室内へと飛び込んだ。

「ファルケか。

誰からだ？」

鷹の鳴き声が聞こえたアルクエイドは先程まで磨いていた銀片翼のペンダントを置くと鷹の止まり木へと歩いた。

そこにファルケと呼ばれた鷹が止まるとすぐに咥えた手紙を取った。そこには『親愛なるAへ』と書かれていた。

「Bからか。

定例会は終わったばかりなのに何の用事だ？」

アルクエイドとB、ブルブランは互いの芸術の価値観を語り合う会合を年一回のペースで開いている。

アルクエイドは作った銀細工の、ブルブランは人の気高さや崇高さを語り合う。

それは互いの思考や創作などを高めるために大いに役立っていた。

アルクエイドは止まり木の近くにある箱に手を入れて、一匹のネズミを掴むとファルケに投げた。

ファルケはネズミを咥えて飛び立って行った。

ファルケは与えられたネズミをそのまま食べるのではなくて、山に放ち一定の距離を保ちながらネズミと追いかけっこをするのだ。

普通の鷹の能力を軽く凌駕するファルケからネズミは逃げられはしないのだが、それを理解しているファルケは遊んでいるのだ。

精神的にネズミを追いつめるために朝まで追いかけるのだ。

逃さずに、捉えずに、追いつめていく。

そうやってネズミを疲労困憊にして動けないところを躍り寄って食すのだ。

「一体その趣向は誰に似たのやら……」

アルクエイドは相棒のその趣向に肩を竦ませながら呟く。

先程まで磨いていた歪な形をした銀片翼のペンダントを掴むと手紙に封をしてある身喰らう蛇の紋章に翳す。

翳した瞬間に紋章が淡く光り、独りでに封が開いた。

その中にある紙を取り、開いて読み始めた。

「親愛なるAへ、如何お過ごしだろうか。

こないだの……」

親愛なるAへ、如何お過ごしだろうか。

こないだの定例会は実に有意義であったよ。

あの時は愛しの姫君を見付けたばかりだったので、少々熱く語ってしまった。

そのせいか、私ばかり語ってしてしまったようだ。

それで気づいたのだが、親友である君はまだ愛しの姫君を見つけ

てはいなかったはずだね？

いやいや、別にそれを貶しているわけではないよ。

それは出会う時に会おうと言うものだ。

正しく運命という他ないのだ。

君にはまだその時が来ていないというだけに過ぎないのだよ。

そこで私が今回筆を取ったのは、君に伝えたい事があったのだよ。クロスベルと言う都市を知ってはいるかな？

そう、君が所有している劇場があるところだ。

その都市でつい先日、警察に特務支援課と言うまるでギルドのようなことをする物が出来たのだよ。

最初はただの警察の庶民への人気取りかと思ったのだがね。

なかなか、あの都市では面白いと思ったのだよ。

政治家や犯罪者、そして他の国の思惑……

そういった遊撃士だけでは到底入り込めない場所に入り込めるといふのは大きな強みといえるだろう。

まだ本人達には理解はできていないみたいだがね。

遊撃士とは違った面白さが味わえると思うよ。

そしてもう一つ、君に伝えたい事がある。

むしろこちらが本題だ。

その君の所有している劇場に興味深い新人が入ったのだよ。

とても血の臭いがする新人がね……

彼女は未だ一本の線が弱々しく感じるが、成長したらどうなるだろうか？

彼女からは大きな悩みを感じる。

どうだろうか、その彼女を見てみたくはないかな？

私と思うに彼女は君にとっても合うと思うのだよ。

気紛れだとしても構わない。

一目見に行っではどうだろうか？

「アルカンシエルに新人ね……
別にどうだっていいんだけどな……」

そのままアルクエイドは手紙を今までの分を纏めている机に置こうとした。

- 助けて -

「……ッッ!？」

何か痛みを感じたのか、アルクエイドは軽く頭^{かぶり}を振った。
そして、手元の手紙に目を落としてから、本来両翼であった銀翼は斜めに欠けており、片翼となっているペンダントに目をやった。

「そうだな、気紛れに懐かしの我が家へと帰ってみるか。
マイスターの顔でも見に行つてやるか」

そう言つて手紙を机に放り投げて、壁に掛けてある黒生地に深紅の歯車の刺繍がしてあるコートを手に取り、その懐に銀片翼のペンダントを入れる。

製作途中の品をベルトバッグに入れて腰に付ける。

「おっと、Bに返事を出しておかないとな」

軽く手紙の返事を書いてから止まり木に貼りつけておく。
これで朝になったらファルケが帰ってきたら、すぐにブルブランに持つて行つてくれるのだ。

最後にエニグマを掴んでから小屋を出た。

「さて、数年ぶりに帰るとするか」

オーバーサイクルに跨り、ハンドルの下にある窪みにエニグマを嵌める。

動力が埋めこまれたことで起動し始める。

アルクエイドは一気に加速して山を駆け降りていった。

ブルブランから来た手紙の最後には、後数文書かれていた。

私が我が姫君を見つけたように、親友である君の姫君が見つかると思うよ。

君にも私の芸術を真に理解できる日を願っている。

そして、今度あった時は君の大事な銀片翼が、何故歪に欠けているのか教えてもらいたい。

君の親友、Bより

と締め括られていた。

Bからの手紙（後書き）

オーバーサイクルの見た目なのですが、ブラック
のゲームに出てくる奴にそっくりとしています
ロックシュータ

期待の新人（前書き）

なんかやたらとレンがえっちい娘になっちゃってる……
少し自重したほうが良いだろうか？
ませた子供ってなかなか難しいです

期待の新人

「それでクロスベルに帰ってきたわけね」

アルクエイドが数年ぶりにクロスベルに帰る原因となった手紙の話をレンは黙って聞いていた。
けれど、そこがレンは気になった。

「でも、変な話ね。

アルはブルブランに言われた程度で、帰って来るようなタイプじゃないでしょ」

「だから、言っただろう。
気紛れだよ」

だからこそレンはおかしいと思った。

彼は物を作っているときに素材を買うことや作品を売りに出すことすら基本的に代理人を使うくらい、外に出ることを面倒くさがるのだ。

ましてや、一番大事な銀片翼のペンダントを磨いている最中に出掛けるなどこれまでしたことがない。

まるで、誰かにそうなるように仕組まれたとしか……

「それで、ブルブランの言っている新人には会いには行かないの？」

「アルカンシエルにか……」

だが、もうすでに夕方だしな」

「明日はあの支援課のおにいさんたちが来るんでしょう？」

「だったら、今から行きましょっよ」

「行きましょっつてお前も来る気が」

「当然じゃない、ほら行きましょっ」

レンはアルクエイドの手を掴むとオーバーサイクルの方に引っ張る。

「ウォークスなら暗くなる前に行けるわ」

「仕方ないな、暴れるなよ」

アルクエイドはレンに引かれるままにウォークスと呼ばれたオーバーサイクルに近づく。

ウォークスに跨るとレンは彼の背後に乗り、腰に手を回した。

「前じゃなくていいのか？」

「別にどっちでもいいじゃない。」

それに、こっちのほうがアルは嬉しいんじゃない？」

わざと胸を反らしてアルクエイドの体に密着しながらレンは言う。
その行動に溜息をつきながらアルクエイドはハンドルを握る。
もう何を言っても無駄だと諦めたのだ。

「それじゃ、パテル」マテルは留守番を頼むぞ」

「良い子にしててね」

「良い子するのはお前だろ」

アルクエイドとレンの言葉に応じてパテル＝マテルは音声を発した。それを聞き遂げるとアルクエイドはウォークスを発進させた。

クロスベルへの道中の魔獣は、ウォークスの排気音や振動を感じる。と逃げ出すのがほとんどだが、偶に恐怖からの行動で襲いかかってくるものもいる。

それらに対してはウォークスに嵌められているエニグマがオートで威力の弱いアーツを起動させる。

それは土属性の防壁を模したものだ。た。

それによって一瞬弾かれて魔獣はウォークスに近づく前に過ぎ去ってしまう。

クロスベルの歓楽街の目玉と成っている劇場、アルカンシエル前にアルクエイドとレンは到着した。

「相変わらずキラキラと派手ね」

「こういう物は目立つ方が都合が良いからな。
わざと悪趣味な金色にしているんだ」

スタツとレンはアルクエイドの後ろから跳び降りて、真正面からアルカンシエルを見上げる。

アルクエイドはその間にアルカンシエルのスターである、イリア・プラティエの描かれた看板の横にウォークスを止めた。

「いつも思っただけど……」

いちいちそれに興味持たれて相手するのが面倒なら、そんな目立つところに置かないほうがいいんじゃない？」

「別に隠さないといけないような事はしてないからな」

歓楽街は夕方でもそれなりに人が多いため、すでに物珍しさからちらちらと遠巻きからウォークスを見ている者が少なくない。

しかし、持ち主がいるからか、あからさまに近寄って来る者はいない。

アルクエイドがアルカンシエルの入り口に向かって歩き出すとレンはその横に連れ添って歩いた。

アルカンシエルの舞台には数人が舞い踊り、舞台裏にはそれに合わせて機械を移動させる。

控え室の方には小道具の修理や調整、服の解れた所を縫い直したりしている。

全員が一体となって劇を製作しているのだ。

暫く予定の物語の練習をしていると休憩に入り、各々が水を飲んだり、座ったり、雑談を始めた。

「リーシャもなかなか様になってきたじゃない」

「本当ですか？」

この劇団のスターであるイリアが先程まで一緒に舞っていた相方に

声を掛ける。

つい先日、入ったばかりの新人であるリーシャはイリアにそう言われて嬉しそうに笑う。

「ええ、入ったばかりなのに凄いじゃない」

「本当だよ。」

イリアが連れてきた時には少し不安だったけど、これなら問題なさそうだ」

「当然じゃない、この私が直々に連れてきたんだから」

傲慢とも取れるイリアの発言だったが、それを不快に感じる者はいない。

それは彼女の自信の表れであるし、彼女からそう言われることはむしろ光栄なことなのだ。

「そう言えばリーシャは入ったばかりだからオーナーに会ったことはないわね」

「と言うか、半分くらいは顔も知らないんじゃないか？」

「え？」

「あなたがオーナーじゃ無いんですか？」

「私は代理人に過ぎないよ」

いつも事務的なことをしている老紳士がオーナーだと思っているものが多いだろう。

リーシャもその一人で、オーナーが別にいると初めて知った。

「まあ、もう何年も顔すら出してないからね。

ミラだけはいつも決まった日に送られて来るんだけどね」

「私でさえも数回しか会ったことがないわよ」

「イリアさんでもそんなに少ないんですか……
どんな人なんですか？」

「知らないわよ。

私たちの中じゃ、他国のお偉いさんってのが一番濃厚だけどね」

「何処の誰で、何してるかも誰も知らないのよ。
格好はいつも決まってるんだけどね」

「そうそう、いつも黒色のコートに深紅の齒車が描かれたのを着て
来るんだ」

「オーナーだと思っていた老紳士が格好を言うと、リーシャが入り口
の方を見ながら言った。

「入り口のあの蒼い髪の人ですか？」

「そうそう、空のように蒼い髪を……している……ね」

「言っていない髪の色を言われて、入り口の方を向くと話題の人物が
そこに立っていた。

その姿を見たとき、老紳士は絶句した。

「オーナー!？」

その人物が誰であるのか理解すると、慌ててアルクエイドに駆け寄った。

アルクエイドは劇場の中を見渡しながらイリアたちの方に向かって歩いている。

初めて中に入ったレンは興味深そうにキョロキョロしている。

「オーナー、事前に連絡を下さったからお迎えにあがりましたのに」

「皆の練習を邪魔するわけにはいかないだろう。

それにそんなモノは必要ない」

「いえいえ、オーナーにそんな失礼なことは出来ませんよ」

「敬語も要らんと言うのに……」

言っても態度の変わらない老紳士に気付かれないように、アルクエイドは溜息をついた。

「お久しぶりね、アルクエイド」

「そうだな、イリア・プラティエ」

「なんでわざわざフルネームで言うのよ」

老紳士と違い、イリアは気軽にアルクエイドに声を掛ける。

「ねえ、アル。

少し中を見てきてもいいかしら？」

「皆の邪魔をしないようにな」

「もう、分かってるわよ」

レンは少し頬を膨らませながらも、楽しそうな足取りで楽屋裏の方に歩いて行った。

「それで、本日は如何な御用で？」

「いや、特に用はないが……悪かったか？」

「いえいえ、オーナーならいつでも大歓迎です」

「そうよ、別にそういう事を気にしなくていいわよ」

あくまでも老紳士は丁寧な物腰で、イリアは友人の様に相手する。ことにリーシャは戸惑っていて、碌に挨拶することが出来ない。

「君が新人か」

「は、はい。」

リーシャ・マオといいます」

「あら、何処から聞いてきたの？」

新人が入ったなんてよく分かったわね」

新人だと言い当てたアルクエイドにイリアは指摘する。

誰も連絡先を知らないから、何時誰が入ったかなどアルクエイドは知らないはずなのだ。

「一応所有者として知ってはおかないといけないうろ」

「私が入ったときはいちいち来なかったくせに。
ダメよ、リーシャは私のものなんだから」

「イリアさん!？」

「別にどうでもいい」

突然のイリアの発言にリーシャは声をあげる。

しかし、アルクェイドは心底どうしても良さそうに呟いた。

「うわっ、失礼な人ね。」

相変わらず乙女心が分かってないわね。

そこは対抗心を見せておくものよ」

「よく言われるよ」

「だったら治そうとしなさいよ」

イリアの言葉にアルクェイドは気が向いたらなと返事した。
その言葉にイリアは呆れてしまった。

「それじゃ、俺はアイツを迎えに行ってくるよ」

「ええ、分かったわ」

アルクェイドはそれで会話を打ち切り、楽屋裏の方に歩き出した。

「そうだ、今度はどれくらい居るの?」

「さあな、数力月はある予定だ」

「あら、かなり長いのね。

だったら、今度私の家に寄ってらっしゃい。

良いお酒を用意しておくわ」

「楽しみにしておくよ」

アルクエイドは背を向けたまま軽く手を振って楽屋裏へと消えて行った。

・あの人、全く隙がなかった

リーシャは暫く消えたアルクエイドの背中を眺めていた。

「どうしたの、リーシャ？

あら、彼が気に入ったのかしら？」

「そ、そんなのじゃありませんよ」

意地の悪い笑顔を浮かべたイリアの言葉にリーシャは慌てて否定する。

そう言いながらも、彼女の意識は彼の消えた場所に向いたままだった。

期待の新人（後書き）

ウォークスはラテン語で咆哮と言う意味です

基本的にアルケエイドに関することはラテン語にしています

アルゲントウムは銀と言う意味です

ファルケは鷹です

まんまですね……はい

傍観者達の思惑

レンを探してアルクエイドは楽屋裏を歩く。

舞台から裏へと回り、途中舞台から少しだけだが、天井から吊つてある機械を見る。

マイスターが調整などはしてくれてはいるが、作ったのはアルクエイドだから細かい調整は出来ないのだ。

アルクエイドは非常に凝った物を作るのだ。

シャンデリアのパーツから吊っている鎖の一つ一つがアルクエイドが作成したものだ。

故に他に変えが利かない代物なのだ。

吊っているシャンデリアの昇降機も軽くだけだが、配線に不備や引っ掛かる感覚はないか聞いた後で楽屋の方へ行く。

すると、一室からレンと数人の女性の声が聞こえてきた。

「レン、そろそろ帰るぞ」

アルクエイドはそう言いながらドアを開けて入った。

「あら、もう帰るの？」

室内には数人の女性に囲まれたレンが、先ほどとは違うドレスを着てくると回っていた。

「えー、もう帰っちゃうの？」

「もつといましょーよ」

数人の女性が不満の声を漏らしながら目でアルクエイドを睨んでく

る。

アルクエイドがオーナーだと知っている女性は一人居るが、他の娘達とアルクエイドを交互に見ながらハラハラしている。

「ごめんなさいね。

もう帰らないと」

レンはアルクエイドが見ているのにも関わらずに、脱ぎ始めた。

アルクエイドはレンの肩が見え始めた辺りで外に出ようと背を向けた。

「外で待っている」

それだけ言つとレンの素肌を一部だけが見たが、気にした素振りを見せずに一言だけ言つてドアを閉めた。

「もう、少しくらい焦つてくれないじゃない」

アルクエイドの変わらない態度に、レンは不満気に頬を膨らませた。その姿に回りにいた女性たちは可愛いと言いながらレンに抱きついた。

アルクエイドとレンがアルカンシエルから出てきた頃にはもうすでに太陽は沈んで夜になっていた。

アルカンシエルは下からライトアップされ、夜でも一層目立っていた。

「なかなか楽しかったようだな」

いつもよりも若干楽しそうな足取りをしているレンを見てアルクエイドはそう言った。

「そうね、結構楽しかったわ」

アルクエイドの言葉に答えながら来たときと同じようにウォークスに跨るアルクエイドの背後に乗った。

「今から行けば支援課のおにいさんたちの大物取りが見られるかしら？」

「全力で向かってやるよ。」

ギリギリ間に合うだろ」

夜中まで時間があるからなとアルクエイドは答えて、マインツ方向にウォークスを向ける。

ギュルギュルと地面を擦りながら旋回して、マインツ山道へ一気に加速する。

暗い夜道をウォークスのライトだけで前を確かめて疾走する。

途中にいる魔獣が逃げる間もなく、ウォークスの前に展開された槍型の防壁に無理矢理弾き飛ばされていく。

異常な速度だというのに、レンはそれを楽しんでいるかのように髪を靡かせながら気持よさそうに目を細めている。

マインツの手前にある門が閉められた旧坑道の前まで来ると人に見つからないように物陰にウォークスを止めた。

アルクエイドはレンを抱えるとさらにその上へと跳び上がって行った。

見晴らしが良く、マインツが見える場所に行くとそこには先客が居た。

「これはこれは、今宵は殲滅天使だけが来るものかと思っていたのだがな」

先客の男はアルクエイドを警戒してか、剣の柄に手を掛けていた。

「何もしねえから落ち着いてくれ。」

「あんたも殺^やりに来たわけじゃないだろ」

男の横に立つと、抱えていたレンを下ろした。

アルクエイドは男に気にせず、その横に片膝を立てて座った。

物見遊山でもせんと言わんばかりに立てた膝の上に肘をついて手の甲に顎を乗せる。

すると、レンが当然と言わんばかりに自然とアルクエイドの横にしている片膝に座る。

「噂に名高い風の剣聖、アリオス・マクレインに出会えるとはな」

「名を知られているのは光栄だが……」

アリオスは語尾をやや強めると剣の柄を握った手に少しだけ力を込めた。

「この地に災いを持ち込むというならば、容赦はせぬぞ」

「心配しなくとも私たちは何もしないわ」

アリオスの挑発と宣告にレンは笑って答える。

それは言葉通り何もしないから笑っていられるのか、それとも容赦されなくても余裕で対処出来るから笑っているのか……
レンが笑っていると宿からロイドたちが出てきて大型の魔獣とマフ
ィアを取り押さえた。

「どうやら終わったようだな」

「そのようだ。」

しかし、まだまだ未熟だ」

「最初はそんなモノじゃないかしら」

「Bが興味を持つのも頷けるかもな」

「アルも興味を持ったの？」

少しだけなとアルクエイドは答えると頬を少しだけ緩めた。
そして、とても小さな押し殺したようなクククという笑い声がレン
には聞こえた。

暫く眺めていると崖下の山道に警備隊の装甲車が数台やって来た。

「これでクロスベル郊外を騒がせていた魔獣事件も片付いたな」

「あのワンちゃんたちはあまり可愛くないわね」

「戦闘魔獣に愛嬌はいらんだろ」

「そうかしら。」

あったほうが和むじゃない」

「相手を和ましてどうする」

レンとアルクエイドが会話しているとアリオスは興味は失せたのか、背を向けて歩き出した。

「あら、もう帰るのかしら？」

「ああ……」

そういえばそちらの御仁の名を聞いていなかったな」

数歩歩いた所でアリオスはアルクエイドへ向き直った。

「……レギス」

「承知した」

名を聞いたアリオスは再び歩き出そうとしたが、アルクエイドな呼び止められた。

「俺も聞きたいことが有るんだがいいか？」

「内容による」

「あんたが頻繁に病院に通っているのは嫁でも入院しているのか？」

「私が通っているのは知っているのにその先は知らぬのか」

「俺は最低限のプライバシーは踏み込まない様にしてんだよ」

本当に知らないのか、それとも言質を取って確認したのか分からない

いが、アルクエイドの真意を探るようにアリオスはアルクエイドを見詰める。

「……娘だ。」

目が見えなくて入院させている」

「そうか、なら明日……」

「明日は支援課のお兄さん達が来るでしょう」

「だったな、明後日ローゼンベルグ工房に来てくれ」

「素直に行くと思っているのか？」

「無駄足にはさせんよ」

「……気が向いたらな」

そう言つて、アリオスは崖下へ降りていった。

「2人とも素直じゃないのね」

アリオスとアルクエイドの会話が面白かったのか、レンはくすくすと笑う。

「支援課はどうやら今夜はマインツで過ごすようだな」

「夜も遅いからね、私も眠くなってきたわ」

「それじゃ、俺らも帰るとするか」

欠伸を噛んだレンを来たときと同じように抱えて、アルクエイドは崖下へ飛び降りた。

彼ら三人がいた場所、そこは違う場所で支援課の行動を見ていた者がいた。

その蒼と白の毛並みを持つ狼は三人の行動も気にしていた。

特に支援課がマフィアを抑えた後は隠す気すらなく、彼らを見ていた。

無論三人はそれに気づいていたが、特に気にしてはいなかった。

崖下へと降りたアルクエイドはレンを抱えたまま、ウォークスに乗った。

発進する時に少しだけその狼がいた場所に視線を送ったが、すぐさま視線を戻して山道を駆け降りた。

睡たげなレンを気遣ってか、幾分速度を抑えて出来るだけ振動や排気音が鳴らないように走行した。

かつて何処かで（前書き）

何か良いサブタイ考えてたらいつの間にか寝てました

そのまま特に思いつかずに微妙なものになってしまいました

ヒロインって誰がいいんでしょうか？

なしならなしでいいんですけど、候補はティオ、リーシャ後レンの誰かで考えてるんですが誰がいいでしょうか？

一応三人とも設定は考えてます

かつて何処かで

「目……か。」

目が駄目なら耳で出来ることか……」

深夜の工房でアルクエイドは端末を弄^{いじく}る。

「噂通りならアリオスとほとんど会話すらできてないだろうな。
データデバイスはエニグマで十分か。」

後は集音と録音、声のトーンか。

……それと1つだけサプライズだな」

アルクエイドは実に楽しそうに口元を歪ませている。

「これで十分か」

背もたれに持たれながら端末に接続されたエニグマを取り外す。

「……ん？」

珍しいな、レンが足跡を残したままにするとは」

画面内には昼間にレンが弄っていた時のままの物が幾つか残っていた。

「いや、敢えて残しているのか。」

面白い子……か。

他には何を見ていた？」

アルクエイドは敢えてレンが目を付けていた面白い子を見ずに他の

を見始めた。

「ルバーチエ、^{ヘイユエ}黒月、何故マフィア……
^{シュヴァルツ・オークション}黒の競売場？」

なんでレンがこれを……なにツツ!？」

レンが残していたままのマフィア関連の情報。

その中での裏社会のオークションの一つである、シュヴァルツ・オークション。

その出品予定のリストの中に二つばかり気になったのが入っていた。

「糞が……」

まだ俺はそこに出した覚えはないぞ。

一体何処から持ってきてやがった……」

端末の置かれた机を壊さんとばかりに力を込めて叩く。

「ルバーチエ会長マルコーニ……」

アルクエイドは冷たい目でモニターに表示されたルバーチエ会長を睨んでいた。

翌朝、マインツの宿場から出てきたロイドたちは警備隊に捕らえた

マフィアを受け渡していた。

しかし、クロスベルのある議員とルバーチエが繋がっていて、ミラを出せば彼らはすぐに釈放されるということを聞くと肩を落とした。

「確かに無駄なことかと思えるかもしれないけど、決して無駄ではないからこれからも頑張ってね。」

ノエル、彼らをクロスベル市まで送ってあげて頂戴」

「イエス・マム！」

上司であるソーニャ副司令に言われてノエルはすぐさま敬礼して答える。

彼女はそのままノエルが支援課を送るための一台の車を残して、マフィアを連れて先に山を降りていった。

「それでは皆様、私が責任を持って送り届けさせて頂きます！」

ノエルがそう張り切ってロイドたちに言うと皆微妙な顔をして見合わせた。

「どうされました？」

「いや、なあ……」

「ああ、ちょっとな」

怪訝な顔をしたロイドたちにノエルは聞いたが要領を得ない答えしか返って来なかった。

「実は今日はこの後、ローゼンベルグ工房に行く予定なのです」

「ローゼンベルグ工房ですか？」

「ええ、だから途中の分かれ道まで送ってもらえないかしら？」

「はい、分かりました！」

エリイの言葉にノエルは敬礼で答えると、五人は車へと乗り込んだ。ノエルは全員が乗ったのを確認したら車を発進させた。

「皆さんはどうしてローゼンベルグへ？」

「昨日あった人に招待されたんだ」

「招待？」

「ローゼンベルグ工房へ？」

「ええ、その人がとても興味深い物に乗っていたので、それを見ていたら来たら詳しく説明すると言われたので」

「へえ、実は私も昨日、初めて見るものに乗っていた人がいるんですよ」

「お、それはオーバーサイクルって奴か？」

「そうなんですよ、支援課の皆さんも会ったんですか？」

「ええ、今日はそれで伺うことになったの」

「誰も入ったことのないあの工房にですか。」

羨ましいですね、私も行ってみたいです」

「それじゃ、ノエルちゃんも行ってみるか？」

「そうしたいのはやまやまですが、仕事がありますので……」

「ところでノエルさん。」

先程から気になっているのですが、その腰の銀細工は……」

ティオは腰に付けられている銀細工が出会った時から気になっていた。

「これですか？」

実はこれ、オーバーペットの一番人気タイプなんですよ」

「ええ！？」

「一個数十万ミラは下らないというレア物じゃないか！？」

「ノエルさん、一体それを何処で？」

エリイやランディがその事実には驚きの声を上げたがティオは至って冷静で聞いた。

「実はその昨日あった人に迷惑料だって二つも貰ったんです」

「二つも！？」

「それで、そのもう一つは？」

「その人の審査をした子に渡してあります。
その子の分だつて言われましたので……」

「そうですか、残念です」

「ティオ助、まだあつたら貰うつもりだったのか……」

ティオのその言葉に皆は苦笑した。

「でも、ティオは確か持っていなかったか？」

「はい、持つてはいますが私が欲しかったタイプではないです。
全く、所長も使えませぬね。」

どうせ持つてくるなら私が欲しい物を持つてきて欲しいです」

「いやいや、それでも頑張ったんだと思うよ」

ティオは持つてきてくれたロバーツ所長に対して大きく溜め息をついた。

ティオの辛辣な言葉にロイドは必死にフォローする。

「しかし、それを簡単に渡すなんて一体何者なんだ？」

「そうね、ローゼンベルグの関係者で珍しい物を幾つも持っている
なんて……」

「案外それを作ってる奴だったりしてな」

「まさか」

「……………」

ランディの言葉に全員が笑い出す。
言ったランディ自身も本気で言っているわけではなく、すぐにだよ
なあと言いながら笑う。

その中でティオだけは何か難しい顔をして黙っていた。

「それでは皆様、自分はこれで失礼します」

「ああ、ありがとう」

ローゼンベルグ工房への分かれ道まで来たロイドたちは、装甲車から降りてノエルを見送った。

「それじゃ、向かうとするか」

「そうね」

「……………」

「どうした、ティオ？」

「いえ、なんでもありません」

ロイドは先程からずっと黙っているティオに声をかけるがはぐらかされてしまった。

・銀細工に蒼い髪……やっぱり何処かで・

ロイドたちは階段を登り、工房前の門へと着いた。

庭の一角には工具を広げてウォークスを整備しているアルクェイドと、その背中に凭れるようにエニグマⅡMを触っているレンの姿があった。

ロイドたちの姿を見ると立ち上がってドレスを少し持ち上げてお辞儀をした。

「ようこそ、ローゼンベルグ工房へ。

歓迎致しますわ、特務支援課の皆様」

レンが頭を上げると閉められていた鉄門が独りでに開いた。

ロイドたちは勝手に開いた門に戸惑いながらも、彼らの方に歩み寄った。

互いに自己紹介を終えた後、ロイドとエリイはレン、ティオとランディはアルクェイドと話していた。

「なるほど、エニグマを動力に使うことで力不足を補っているわけ

ですか」

「速度を出すとその分消耗は激しいが、セキュリティは万全になる」

「個体識別番号でロックをかけるわけですね？」

「そうだ、後エニグマのアーツを使うことで事故を極力防ぐことも出来る」

「しかし、オートで使うには些か危険じゃないですか？」

「現状は威力を下げて相手に怪我させない様にするしかない」

「なるほど……」

何かを思案しているティオに変わって、今度はランディが話しかけた。

「なあなあ、俺も乗ってみたいんだが」

「乗るのは構わないが、乗用車の免許は持っているのか？」

「あー、持ってねーな」

「一応乗用車として登録しているから、乗らない方がいいだろう」

「今は警察だしな、皆に迷惑かけるわけにはいかないか」

「一人用だしな、レンくらいなら一緒に乗れなくはないが……」

「……だったら、私を乗せてはくれませんか？」

「構わんぞ」

「かぁーっ、羨ましいぞティオ助」

アルクエイドはウォークスに跨がるとティオの手を引っ張って後ろに乗せた。

・手を引かれるこの感覚、やっぱり何処かで・

アルクエイドはティオを乗せてウォークスを発進させ、階段を駆け下りた。

「アゝアゝアゝアゝアゝ、階段は無茶です！」

一段ずつ揺れの振動がかなりくるのか、ティオは悲鳴を上げていた。

「俺も免許取るのかなぁ」

もう見えなくなった彼らを羨ましく思いながら、ランディは呟いた。

「ち、ちよっと、と止めっ止めて下さい！」

ティオの制止の要求を聞かずにアルクエイドは一気に階段を駆け下りた。

「どうした？」

分かれ道に着いてから漸くアルクエイドはウォークスを止めた。

「はあはあ……はあっ……」

どうもこうも、階段を降りるなんて無茶です！」

階段の振動で落とされないように、必死にしがみつくなかなか下りきつかったのか、ティオは息も絶え絶えだった。

「レンはいつも平気そうにしているぞ？」

「レンちゃんが……？」

後でコツを聞いておきます」

「そうしろ。」

取り敢えず、マインツまで往復するか」

「分かりました」

アルクエイドはティオの返事を聞くと、ウォークスをマインツへ向けて発進した。

「これは……」

普通に動かすのでもアーツが発動している？」

ティオはウォークスの周りに微かに力を感じた。

力はウォークスの先端から流れていた。

「よく気付いたな。」

空気抵抗を出来るだけ少なくするためだ。

そんな小難しいことは考えずに今は乗り心地を楽しんでろ」

「……そうします」

本音を言えばまだまだ聞きたいことだらけだが、聞いても答えないだろうとティオは思った。

「少し加速するぞ」

その言葉に答えずに、ティオはアルクエイドの背中を掴む力を少しだけ強めた。

アルクエイドは服が引っ張られる感じが強くなったことを感じると加速した。

それに伴い、心地よい振動がティオにも伝わっていく。

マインツの前に来た辺りで、ティオはアルクエイドに話しかけた。

「あの、何処かであったことが無いですか？」

「俺とお前がか？」

「そうです」

「……いや、記憶にないな」

「……そうですか」

そのまま、ティオは黙ってしまった。

暫くの間走って分かれ道が見える辺りまで戻ってくると、コッソとアルクエイドの背中に何かがぶつかって重みが加わった。

それが何か瞬時に理解して、幾分速度を落としてそのまま再びマインツ方向へ向かった。

「寝始めたか……」

レンもそうだったが、女つてのは器用なもんだな……」

ゆっくりと、程良く頬を撫でる風を感じながらアルクエイドは何度も往復していた。

楽園の終わり（前書き）

感想でアルクエイドの年を聞かれたので書いておきます

アルクエイドは19歳です

ロイド、エリイが18なのでその上ですね

生まれは共和国です

マイスターに拾われたことはそのうち本編で書きます

楽園の終わり

「悪いレーヴェ、遅れた」

「遅かったな」

「しつこいのがいてな、うざいからバラしてきた。ガキの目の前でやっちゃったけど大丈夫かね？」

「芸術家というのはそういうものじゃないのか？ その子供には同情するな」

「俺とアレと一緒にされるのは心外なのだが」

「自分の価値観に無理矢理理解させようとする輩という意味だ」

「喧嘩売ってんだろ、な？」

「そんなことより……」

「てめえ……」

「まあいい、今は胸糞悪い『楽園』潰しだ」

「この世に楽園など無いことを教えてやろう」

そこには銀と蒼、黒の三人がいた。

黒は依然と口を開かず、銀は無然と冷静に、蒼はとてつもなく苛立っていた。

黒と銀は剣を構え、蒼は袖からジャラジャラと鎖を垂らす。

蒼が鎖をドアにぶつけて力づくで吹き飛ばす。
それを合図に三人は館の中へ踏み込んだ。

「この日、楽園は消え去った」

「もっかい答えて貰おうか？」

「これの何処が芸術なんだ、ああ？」

「……………」

「放してやれ、もう既に死んでいる」

「チツ、胸糞悪い。」

「アレもそうだったが、こっちもうぜえ。
生き残りはいたか？」

「一人だけな」

「こいつは……………」

「この傷は恐らく自分で付けたものだろう」

「そうじゃないと耐えられなかったか。」

裏の世界は何処^{どこ}も彼処^{かしこ}も狂ってなきややってられないよな」

自嘲する笑みで蒼が言つと銀は聞く。

「まだ、後悔しているのか、この世界に入ったことを」

「別にしてないよ。」

「マイスターにや感謝してるし、生か死かって言われたら生だろ、普通」

「お前はまだ子供なんだ、泣きたい時は泣けばいい」

「涙なんざ、友達に殺されかけた時に枯れたっての……
俺は覚えちゃいないがな……」

「だからアルはレンの王子様なの」

「ははっ、王子様か」

「レンはお姫様なのだから王子様なの」

「ふふ、羨ましいわね」

アルクエイドがティオを乗せて駆け下りるとき、レンはロイドとエリイに馴れ初めを語っていた。
無論大幅にぼかしてはいるのだが……

「ア、ア、ア、アアア、階段は無茶です！」

それを微笑ましく笑っていると、悲痛な声が聞こえてきた。

「……………」

「なんだ、今の？」

「さ、さあ……？」

「もう、レン以外の人を乗せるから……」

「えっと、レンちゃん。」

今のつて……」

「アルがウォークスにレン以外を乗せたら皆叫ぶのよ。
すっごい乗り心地が良いのに」

アルクエイドがレン以外を乗せているからなのか、それともウォークスに乗っているのに悲鳴を上げているから不満なのか、レンは面白くなさそうな顔をしていた。

「ねえレンちゃん。」

アルゲントウム製品つてもしかして此处で作られているの？」

「いいえ、でも作っている人なら知っているわ」

「本当なの！？」

「誰なんだ！？」

「誰ってアルよ？」

「あの人が！？」

「マジかよ……」

テイオとアルクエイドが走り去って暇になったのかランディもロイド達の方に寄って来ていた。

「だから気軽に二つも渡したのか……」

「私のこれもアルが作ってくれたのよ」

そう言っでレンは懷からエニグマⅡMを取り出す。

エニグマⅡMはアルクエイドが作ったものでレンしか持っていないのだ。

オーバーペットはもともとアルクエイドがパテルⅡマテルのために作っていたものだ。

しかし、まだ完成はしておらず、完成のためのデータ収集のために売りだしたものだった。

「エニグマにオーバーペットが入っている……」

「ってか、これ端末みたいに画面通話も出来るぞ！？」

「何者なんだ、あの人……」

ロイドたちが驚愕する中でレンは終始笑っていた。

夕方になってアルクエイドはティオを抱えて歩いて階段を登ってきた。

ウォークスに乗ったまま登ると振動で目を覚まされても困るし、落ちたら少々の怪我では済まないからだ。

結局、ティオが一度も目を覚ます事なく、ローゼンベルグ工房に戻ってきた。

「……ん…あ？」

「起きたか」

アルクエイドの背に乘せられていたティオは門が見える位置まで来るとようやく目を覚ました。

「……っ!？」

も、ももう大丈夫です、下ろしてください!」

自分が何処で寝ていたか気づくとティオは慌ててアルクエイドの背から下りた。

「……不覚です」

ティオは大きく肩を落としていた。

「小さい体で特務支援課を頑張っているんだ。
疲れていて当然だろう」

「小さいは余計です」

「悪かった」

アルクエイドの言葉に少しだけ機嫌を悪くしたように見えたティオは早足で工房へ戻っていった。
しかし、ティオの口元は少しだけだが、緩んでいた。

その後、ロイドたちは彼らを別れ、クロスベル市へ戻った。
アルクエイドとレンは彼らの背中が見えなくなるまで見送っていた。

「レン、後でティオ・プラトーの経歴を調べておいてくれ」

「あら、急に女の子を調べてくれなんて……惚れたの？」

「……………」

「冗談よ冗談」

「ティオ・プラトーに何処かで会ったことはないかと言われたんだ」

「ふん、それは気になるわね。」

引き籠もりのあなたに出会うなんてよっぽどよ

「^{やかま}喧しい」

アルクエイドは相手に出来んと言わんばかりに工房の中へ入っていった。

レンはそんな彼を気にせずに、ロイドたちを見ていた。

「ふふ、これはちょっと私たちも面白くなりそうね」

レンは嬉しそうにいつまでも笑っていた。

余計な荷物（前書き）

何故かレンとの絡みが書きやすいんですね
そのためになぜかレンがややえっちい娘に……

もっとも今回は全く出てきませんが

余計な荷物

ロイドたちが支援課に戻るとそこにはあの蒼と銀の毛並みを持つ狼がいた。

疑惑を晴らした礼としてサポートするために住み込み、警察犬として登録された。

既にあの魔獣事件から一週間が経っていた。
特に目立った事件もなく、支援課のメンバーは比較的平和な日々を過ごしていた。

「また駄目でした」

そう言つて、無表情な顔でティオは事務所に入ってきた。

「よくあれだけ断られていながら、ティオ助も毎日通えるな」

既にこの光景は珍しくなくなっていた。

「初めてそう言われて入ってきたときは何かと思ったよな」

「そうね、あからさまに肩を落として入って来たわよね」

ローゼンベルグ工房に行った次の日からティオは通い始めた。
初日の落ち込み具合は全員が驚愕した。

何があったのか聞くと頼みを断られたという。

今ではさほど落ち込んだ様子はなく、皆もまたかと言って苦笑していた。

「けど、毎日何処に行っているんだ？」

「初日はIBCのビルに調べ物へ、次の日からはローゼンベルグ工房です」

「ローゼンベルグへ？」

何しに行っているんだ？」

「そんなの決まってるじゃないか。

あのオーバーペットを譲って貰いにだろ」

「ランディさんは失礼です。

私がそこまで欲しがっていると思っているのですか」

「そうだぞランディ。

いくら……」

「まあ、断りましたが……」

「って頼んだのかよ！」

「はは、ほらな」

「はあ……」

あまり迷惑かけないようにな」

「分かってます」

そう言つて、ロイドはトンファアの整備に、ランディはグラビア雑誌に戻った。

エリイは自室へと階段を上っていった。

ツアイトはいつも通り屋上で日を浴びているだろう。

テイオもエリイに続いて階段を上っていった。

自室に入ったテイオは机の上に置いてある紙束に目を通す。

そこにはアルクエイドについて書かれていた。

しかし、アルクエイドについて書かれていることは少なく、一枚目の半分にも満たない。

他の紙はオーバーペット等のアルгентウム製品とオーバーサイクルについてだった。

「IBCのネットワークでも何もないなんて……」

最初は自分の閲覧できないところに保存されているのだと考えて、エイオンシステムを駆使してまで調べたが掠りすらしなかった。

だから、次の日からは本人に聞きに行ったが、あなたは何者ですか、なんて聞けるはずもなく、アルクエイドについて分かることは何も増えなかった。

分かっていることは名前とアルгентウム製品とオーバーサイクルを作ったことだけ……

「謎過ぎです、怪しすぎます……」

眩きながらテイオはベットに飛び込んだ。

ギシギシとベットは軋むが気にせずテイオは転がる。

そして、枕元にあるみっしい人形を抱き寄せた。

「私はあの人かどうか確かめただけなのに……」

テイオの脳裏に甦るは忌まわしい記憶。

あれから長いときが経つが未だ忘れることは出来ない。

それはロイドの兄である、ガイ・バニングスが助けに来るよりも前

のことだった。

最初は夢だと思っていた。

いや、今でもアレは夢だったんじゃないか？

辛い日々から逃避するために見た幻だったんじゃないか？

そう思う。

- 確かにあの人は蒼い髪に銀色の何かを持っていた -

何度も夢じゃないと信じながら……紅く染められた光景を……

忌まわしい記憶に体力を消耗したティオは何時の間にか寝付いていた。

その頬には一筋の涙が流れていた。

「これがティオ・プラトーの経歴か。

幼少の頃に失踪、三年後にウルスラ病院に入院、その数ヶ月後に家に帰る。

しかし、馴染めずにエプスタイン財団に出奔。

そして、今回オーバルスタッフのデータ採集のため特務支援課に協力……」

レンが集めた情報を読み上げて、忌々しげに紙を机に放り投げる。

「この失踪の間の場所と内容、出奔の理由は無いのか？」

「私が調べた限り無かったわ」

アルクエイドはレンの返事に苛立たしく髪をかき揚げる。

それは知りたいことが無いからではなく、恐らくティオが他人に知られたくないことを知ってしまったからだ。

しかし、レンは嘘をついていた。

レンはちゃんとティオが何に拉致されていたのか、知っている。

不幸にも、それはレンが拉致された集団の一部が楽園だったからだ。アルクエイドはレンの過去を聞いたことはない。

それはレンが聞かれたくないと思っていると思っていたからだ。

実際、レンはそれをアルクエイドに知られたくなかった。

一度それに繋がる情報を渡せば、すぐに知るだろう。

だからそれを渡せなかった。

アルクエイドも他からレンの過去を聞くのは良しとしないだろう。

本人が知られたくないなら尚更だ。

ティオの過去も細かいとこまで知る気はなかった。

ただ何処で会う可能性があったか知りただけだ。

「迂闊だったか……」

ヤバイ可能性は大いにあったのだ。

あの年で警察、しかも特務支援課という特殊な場所、そしてアルクエイドに会ったことが有るかもしれない。

これだけでティオに何かあると知るには十分だったのだ。

「自分の荷物、勝手に背負われちゃ気味が悪いよな」

アルクエイドは目の前のレンが調べたティオ・プラトーの経歴を握

りつぶした。

「少し出かけてくる」

「何処に行くの？」

「IBC本社」

「いつてらっしゃい」

珍しくウォークスに乗らずに、アルクエイドはコートを掴むと工房から出ていった。

蠢く死神

アルクエイドは歓楽街から裏通り、広場から東通へと周り、港湾区歩いていた。

「ルバーチエ、黒月、黒の競売場、政治に金融か……
人の闇と言うよりかは欲の集合だな」

アルクエイドは皮肉な笑みを浮かべながら一通りのクロスベル市を見ていた。

「特務支援課が出来るわけだ。
確かに遊撃士だけじゃ踏み込めない場所が多すぎる」

ローゼンベルグ工房に来てから一週間経つが、アルクエイドは初めてクロスベル市を散策していた。

「だが、欲の中にこそ、闇は紛れやすい。
欲の方が目立つからな」

アルクエイドは口元を歪めながら、IBCビルの正面に辿り着いた。

「俺も欲に紛れさせてもらおう」

ガラスのドアを潜り、受付へと真っ直ぐ歩く。

「データー・クロイス社長と面会したい」

「社長と……?」

訝しむ受付嬢はアルクエイドを品定めするかのような目で見る。
いきなり社長と面会したいなどと言ってきたら当然の話だ。

「失礼ながら、どちら様でしょうか？」

「Aが来たと言えは分かる」

その視線を全く気にせずに答える。

その答えを怪しく思いながらも、受付嬢は社長と連絡を取った。

「社長、今受付にAと名乗る方がお見えになっております。
社長と面会したいと仰っていますか……
畏まりました」

如何にも事務的な応答をした受付嬢はアルクエイドの方に一枚のカードキーを差し出した。

「此方のカードキーをお使い下さい。
エレベーターの端末に御使い下さい」

アルクエイドは受付嬢の話を全部聞かずに、カードキーを手渡され
るとさっさとエレベーターに入っていた。
そんなアルクエイドを怪しく思いながらも、常務へと戻った。

ディーターは社長室で仕事をしていた。
そこに音もなくアルクエイドは現れた。

「君はどうしていつも順序を踏むのに最後で飛ばすんだい？」

扉が開かれることなく、ディーターの座っている前に突然現れたアルクエイドに驚くことなく聞いた。

「別にいつもって訳じゃないだろ」

「君がそう入ってくるときはいつも面倒事を持ってくるだろう」

ディーターはアルクエイドに見向きもせず書類に書き込んでいく。

「それで、今日はどんな用だい？」

「黒の競売場……」

「この招待状が欲しい」

「……………」

その発言を聞いたとき、ディーターは依然と動いていた手が止まった。

「先刻私が言った言葉に偽りないじゃないか」

「否定した覚えはないが？」

「本当に君は嫌な性格をしているね」

「お前が言つか」

元から和気藹々等といった雰囲気ではなかったが、一気に殺伐とした空気に変わる。

「何故それが必要なんだい？」

「気になることがあつてな」

「しかし、私にも……」

「いいじゃないですか、お父様」

彼らの会話を聞いていた一人の少女が居た。
彼女はそう言いながらドアを開いた。

「彼に隠し事をしても得はないでしょう。
むしろ、彼から借りを作るチャンスではなくて？
丁度いいことに複数来ている訳ですし」

ディーターの娘であるマリアベルにそう言われて、溜め息をつきながら彼は机の引き出しから一通の手紙を取り出した。

「借りはそのうち返す。

後、アレのデータを貰って帰るからな」

それを受け取ってアルクエイドが入ってきたときと同じように音もなく消えた。

「彼の要求はいつも無茶ばかりだな」

「いいじゃありませんか、彼には得させてもらっているのですから」

「最も、アレのデータで何をしているのか分からないがね」

「私たちと組んで利がある限り、彼は裏切りませんわ」

ディーターは厄介ごとを抱えたように苦悩していたが、それとは逆にマリABELは頬を歪ませていた。

マリABELはそう言うが、ディーターはそうは思わない。彼は独自の正義、思想で動いているのだ。

そういう輩が一番厄介だというのを知っているのだ。

そういう輩に限って、どんなに逆境でも、可能性がなくても、死にかけても、絶対に諦めないし、挫けない。

だからこそ、そういう時に何をするか分からないのだ。

だからディーターはアルクエイドを信用しない。

ウルスラ病院の一室。

ここにアリオス・マクレインの娘、シズク・マクレインは入院していた。

彼女の部屋には少女特有のぬいぐるみなどが存在していなかった。殺風景な病室を彩るいとのは花瓶に添えられた花くらいだった。

「それでね、こないだ来た支援課の人たちが……」

「そうか」

彼女は彼女以外誰もいない部屋で一人喋っていた。

まるでそこに父親が居るかのように話す。

とは言っても、彼女が寂しさからおかしくなったというわけではない。

彼女の寝台の近くにある机の上にある機械が置かれていた。

そこからは父親の声が聞こえていた。

それはシズクの話に相槌を打ち続けていた。

楽しい話にはアリオスの声も嬉しそうに、シズクの声のトーンに合わせてアリオスの声も変わっていた。

その機械はロイドたちが来た次の日にアリオスの声を録って、創り上げたものだ。

その為に、アリオスは異常な量の質問を答えさせられていた。

さらにその答えを元に、アリオスの性格を把握して声を入れたのだ。そして、シズクの話に相槌だけが、出来るようになったのだ。

この機械はそれだけでなく、シズクの会話を同時に録音している。

仕事の休みのときに来るアリオスが機械の中にあるメモリを入れ替えて、後でアリオスが聞けるようになっていた。

最初は抵抗があったシズクも今となっては嬉々としてそれに話しかけている。

時には看護師達との会話を録ったりしている。

シズクはたまにしか来れないアリオスと疑似会話とはいえ、楽しめるようになっていた。

ある意味、ビデオレターみたいなものだが、相槌だけとは言え、会話を楽しめることに違いはなかった。

長いこと入院しているからある程度寂しさには慣れているとはいえ、まだまだ親に甘えたいのだ。

そこにコレをプレゼントしてくれた。

差はあるとはいえ会話出来る。

休日には一緒に出掛けて会話も出来るがし足りないのだ。

だが、アルクエイドは親切心だけでこれをアリオスに渡したのではない。

オーバーペットもコレも全てデータ集めなのだ。

- 全ては ■ ■ ■ ■ ■ が原因だった -

「ぎゃあああああああああッッ!？」

夜闇に悲鳴が響く。

最近、夜に人が死ぬ事件が頻発していた。

死体はいずれも五体満足ではなく、腕や足がバラバラに切断されていた。

地面は血で真っ赤に染め上げられて、生臭い鉄分の臭いがその場に充満されていた。

須らく、それを見つけた人物はあまりの噎せ返る臭いと死体の惨さに、その場で嘔吐したという。

「く、くるなあああああああああ!？」

今夜の被害者はこの男だった。

迫り来るソレから必死に逃げようと走りまくる。

道端の障害物を蹴り飛ばしながら、時にはそれに足を盗られて転び

ながらも逃げ続ける。

それでもソレからは逃げれない。

自分を転ばしたものを投げても避けられる、当たらない。
ゆらゆらと揺れながらソレは一定の距離を保つ。

縮まることも長くなることもない。

「なんでッ、追いかけてくるんだああああ!？」

ソレは一言も発しない。

いや、人であるのかさえ分からない。

ソレからは人らしさが微塵も感じられない。
時に何かが体を裂くが、獲物は分からない。

「ぐあッッ、ややめ、やめてくれ、い嫌、嫌だあああああああ
あああああ!」

この日新たに一つのバラバラ死体が出来た。

欠けた支援課（前書き）

今回最初が結構グロイです
注意です

ひどすぎるなら今後は出来るだけ描写を抑えます

欠けた支援課

夕方に一時的に寝付いてしまい、夕食の時に起こされたとは言え、睡眠とは十分取ってしまふと勝手に起きてしまふものだ。

ティオはまだ外が白い光で明るくなってきたている早朝に目覚めた。皆が起きる時間までベットで転がっていようと考えたが、昨日思い出した光景が幾度と甦る。

体を動かせば多少は気が晴れると思ったティオはもそそとベッドから出た。

「やっぱりこの時間は気温が低いですね」

この時間は一番人がいないため、彼女が周りを見ても誰もいない。少し歩いて広場の鐘に來た時だった。

ティオは他人より感知能力が高く、裏通りに無数に動く気配を感じた。

「こんな時間に何でしょうか？」

不思議に思い裏通りに近付くと思わず鼻を防いであう程の異臭が漂って來た。

「う……これは……」

かつて、あの時に見た光景が脳裏に鮮明に思い出す。

いや、目の前の光景はそれ以上に酷い。

生臭い鉄分と肉の腐敗臭。

それに視線を向けるとぐちゃぐちゃとそれを貪るカラスの群だった。バラバラに裂けた腕や足、指。

死肉に群がるカラスどもはそのクチバシで目をつつき、ハラワタを
抉る。

「あ……ああ……」

その光景にティオはその場で腰を抜かしてしまった。

悲鳴を上げたくとも恐ろしさで声が出せない。

口を動かしても恐怖で歯が震えてカチカチと音を鳴らすだけ。

初めは気紛れだったのに……

どうして自分はこんな悲惨な光景を見ているんだ。

忘れたくとも忘れられないあの時の記憶に呪われているかのように
錯覚する。

「ああ……どう……して？」

「なんでだろう、わたしがこんな目にあっているのは？」

わたしはただ、あの人に会いたいだけなのに――

そう思ったときティオの背後から二本の腕が伸びてきて、ティオの
体を引き寄せた。

何者かの胸元に引き寄せられて、顔が見えるよりも早くに頭を胸に
抱えられた。

その時にコートの裏側にある銀細工が目に入った。

「大丈夫だ、安心しろ」

「やっぱりアレは――」

「やっぱり憑いて来たか、死神」

その言葉を最後にティオの意識は途切れた。

「ティオ助がいなくなっただあ!？」

特務支援課にランディの声が響いていた。

朝食時になっても現れないティオを呼びに行ったのはエリィだった。ドアをノックしても返事がなく、部屋の中に入ってみるとそこは無人だった。

「部屋には誰もいなかったわ。

オーバルスタッフはあったから市外には行ってないと思うのだけれど……」

「散歩じゃないのか？

ティオ助もそこまで子供じゃないんだ。
心配し過ぎだろう」

「だが、さすがに食事の時間になっても戻ってこないのは気になるだろう」

いなくなったティオを心配しているとそこに通信機が鳴った。

「はい、特務支援課です。」

はい……

なんですって!?

……分かりました。

それでは市内を定期的にパトロールします」

通話が終わるとロイドは他のメンバーに振り向いた。

「なんだったんだ?」

「裏通りで殺害事件があったそうだ」

「ええ!?!」

「何だと!?!」

「被害者は男性、カラス等により損傷が酷いため、身元の確認は取れていない」

「最近多いわね……」

今週に入ってもうすでに三人……」

「ああ、それで今回は緊急のモノがない場合は基本的に市内を巡回して欲しいそうだ」

「街の奴らも不安だろうしな」

「巡回ついでにティオ助も探さないとな」

「ああ、今日は各自指定の場所を巡回してくれ」

「分かったわ」

ティオの欠けた特務支援課の一日が始まった。

欠けた支援課（後書き）

言っときますが、今回本編でも書いたように死神は■■■■■で
はありません

今回短いのは次回が長くなりそうだったからです
それではまた次回で……

すでに貼った伏線回収しようとしたらさらに貼るしかなかった…
…

テイオの記憶（前書き）

今回は捏造大量になってしまった……

あと、基本的に土日祝日は更新するつもりはないです

書く時間がとれたり、調子に乗れたらするかもしれませんが

ティオの記憶

「許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない」

死神は闇の中を漂う。

血に塗れた手からポタポタと血が垂れる。

「あの人の作品を勝手に奪うなんて許せない」

死神は正しく呪詛の様に発していた。

同じ場所をグルグルと円を描く様に歩く。

足元にある大量の水分が足を出す度にビチャビチャと音がする。

「あの素晴らしい価値を理解出来ない輩がそれを持つことなど許せない」

その呪詛はまるで何かを讃えるように呟かれる。

「僕が初めての理解者なんだ」

恨むように、悲しむように、羨むように死神は呟く。

「だから他の奴らがそれを汚すなど許されないことだ」

その空間に常人が踏み込めば、一瞬で気を失うくらいの狂気と血臭が充満していた。

死神はしゃがみ込み、足元に満たされた血を掬い、目の前のモノに掛ける。

まるでそれは神像を清めの水で浄化する様だった。

「後にも先にもあの人の理解者は僕だけなんだ」

死神は讃えながら目の前のモノに血を注ぎ続けた。

「だから僕はあの人に捧げ続けるんだ」

アルクエイドに抱えられたティオは住宅街の誰もいない屋敷に連れて行かれていた。

ソファにアルクエイドのコートを敷き、その上に寝かされていた。

「私まで連れ出すなんて、ここはちょっと都合が悪いのだけど」

「分かっている」

ティオを見守るアルクエイドに溜め息をつきながらレンは文句を言う。

アルクエイド自身もレンをこの住宅街に連れて来たくはなかった。

しかもこの昼間に……

この住宅街にはレンの本当の親が住んでいるのだ。

ある程度は鉢合わせにならないように気をつけてはいるが、不確定

要素はある。

レンは親に捨てられていると思っていたのだ。

「それでも、お前には伝えておかないといけないことだ」

「一体何だと言つのよ?」

「死神が現れた」

「ツツツツ!」

アルクエイドの言葉にレンは息を飲んだ。

「あの狂人が現れたの?」

本当に獣のように鼻が利くわね」

「人は捨てている」

「既にその身は畜生の身ってね」

「笑い事じゃない」

アルクエイドとて死神は厄介だった。

レンは言うように死神は異様に鼻が利く。

自分よりも強者……

レンやアルクエイドとは絶対に出会^{でくわ}さないのだ。

一回、彼らで死神を消そうとしたのだが、噂があっても出会いはしないのだ。

それ程にまで鼻が利く。

「それでこの娘はどうしたの？」

「死神の現場を見ていた」

「あら、御愁傷様ね」

「……………」

出来るだけ辛気臭い空気にしないとレンは軽口を言うが、重い空気は変わらない。

「……ま、待って……ください」

魔されているティオは藻掻くように手を動かし始めた。
その手の動きは何かを掴もうとしているようだ。

「待って、下さい……わたし……つれっ」

何かを願うように手を伸ばすティオ。
けれど、その手は空気を掴むだけだった。
目からは涙が流れていた。

「何を魔^{うな}されているのかしら？」

「さあな」

レンの言葉に冷たく返すとアルクエイドはティオに近寄った。

「安心しろ、お前は何も見ていない」

普段の言動からは想像できないほどの優しい言葉を宙を漂うティオの手を握って言う。

その光景にはレンも驚いていた。
暫く魘されていたが、ティオは落ち着いていた。

「どういつつもりなのかしら？」

返答によつては……」

あくまでも笑顔でレンはアルクエイドに言う。

「俺が原因なのだから、最低限のことはしないとな」

「アルのせいじゃないでしょ」

「俺が来たから憑いて来た様なものだ」

「それはどうかしらね」

死神の行動理念は確かにアルクエイドが元になっている。

しかし、今回の原因とはあまり関係ないとも言える。

死神はアルクエイドの作品のある場所に現れるのだ。

それは最初の事件からだった。

気紛れで孤児に渡したペンダントを何処で知ったのかさえも分からない。

だけど、そこに死神は現れた。

「……………」

歯痒いアルクエイドは奥歯を噛み砕かんばかりに噛み締める。

「アル……」

そんなアルクエイドにレンは背後から抱きついた。
本当は抱きしめたいのだろうが、彼女らの身長差ではレンが抱きついてるようにしか見えない。

アルクエイドは死神のことになるといつも自分が原因だと言う。
その度にアルクエイドは自分を責める。

そんなアルクエイドをレンは幾度と見てきた。
だが、そんなアルクエイドに抱きつくのは初めてのことだった。

「……アレは俺が作り出したような物だ」

「それってどういう……？」

「あ……」

その意味を問おうとする前にティオが目覚めた。

「……私を連れて行って下さい」

「は？」

ティオは目を覚ますと、暫く視線は宙を彷徨っていたが、アルクエイドを見るとそう呟いた。

アルクエイドは何を言われたか分からなかった。

「夢の内容じゃないかしら？」

アルクエイドに抱きついたまま、レンは目を覚ましたティオを見た。
数度瞬きするとティオはようやく此处を何処か確かめるように視線

を動かした。

「あの……ここは？」

見覚えのない場所だと気づき、ティオは目の前のアルクエイドに尋ねる。

「此処は住宅街の空き家よ」

ようやくアルクエイドから離れたレンはアルクエイドを押しつけてティオの前に出る。

「あの私は一体……」

「思い出さないほうが良いわよ」

気を失う寸前に何があったか思い出そうとするティオをレンが止める。

「俺は支援課の奴らに伝えてくる」

「あの、私も行きます…っ」

ティオがいることをアルクエイドがロイドたちに伝えようと外に向かうと、ティオは起き上がろうとするが体が悲鳴を上げた。

何もしてないとはいえ、目を疑うようなことに出会い、トラウマを思い出したのだ。

頭が悲鳴を上げて当然だった。

「いいから、寝ておきなさい」

レンに押されるままにティオは寝かされた。

「私を連れて行って下さい……か」

「レンちゃん、聞いてもいいですか？」

アルクエイドが出て行ってから数分後、寝かされているティオは口を開いた。

「なあに？」

「あの人は何者なんですか？」

「どついう意味？」

質問の真意が分からずにレンは聞き返した。

「あの人は……」

それから先を口にしていいのか分からず、ティオは口籠もった。

「恐らく、アナタが思っている通りの人よ」

ティオの言葉から察したレンはそう言った。

「そうですか……」

それを聞いて安心したのかティオは目を瞑ると、先程とは違う安らかな寝息が聞こえ始めた。

「俺をてめえらと一緒にすんじゃねえ！」

かつての記憶。

忌々しい、人体実験の頃の記憶。

そこにあの人は現れた。

先刻まで無関心な表情だったのに、一瞬で激高した。

わたしの場所からでは何を言われたか聞こえなかったけど。

ぐるぐると何処から出しのか、わたしをいつも傷めつける人を鎖で縛り上げていた。

それでもその人はわたしを見ると同じ顔で嫌な笑顔をしていた。その人がさらにあの人に何か言っていると、その人はさらにきつく鎖を締め上げられた。

限界以上に締め上げられたあの人は血をぶちまけて死んだ。
一緒に肉片も私の方に飛んできたりしたがわたしは何も気にならなかった。

今まで苦痛を与えてきた人がいなくなった。

その事実がわたしの中でとてつもなく嬉しかった。

これでもう痛くされないのだと思ったから。

激高した感情を息荒く沈めようとしているあの人はわたしに気づくと歩み寄ってきた。

わたしの目の前まで行くとわたしの顔に付いた血や肉片を手で擦り落としてくれた。

ずっとわたしはそれを呆然と為すがままにされていた。

わたしはあの人の首から下げられた歪な形の翼が目についた。

「いたぞ！

アレらを使え！」

「くそっ」

「……いや、助けて……」

あの人が後ろを向くと同時にわたしはそう呟いていた。

あの人の背後から声が聞こえる。

それと共に獣のような声が聞こえる。

それはわたしと同じ子供だった。

だけどそれは最早人とは思えない動きをしていた。

あの人はそれから逃げるように獣をかわしながら部屋を飛び出た。

「くそ、あいつはなんなんだ。

おい、コイツらを別の部屋に入れておけ」

獣を連れてきた人が側の人に行つてわたしを強引に引っ張っていく。
あの人はいなくなつてしまった。

やつとこの苦痛から助けられると思つたのに。

わたしは別の部屋に入れられてまた苦痛の日々を過ごすことになつた。

それからの日々はこれまでとは少しだけ変わった。

前の人が死んだからか、前ほどの苦痛ではなくなった。

あの人が助けてはくれなかったけど、多少の感謝はしている。

あの人が来てから数日後、わたしは別の人達が助けに来た。

「君に伝えることがある」

その中で一人がわたしに話しかけてきた。

「これは依頼主からの言葉なんだが……」

あの時に君を助けられなくて悪い、とのことだ」

あの時のことはわたしも助けられた時は殆ど覚えてなかった。

あれは夢だと思つていたし、それを言われた時もまともな状態じゃなかった。

だけど、今日初めて分かつた。

あの時の出来事は本当の事で、あの人はアルクエイド・ヴァンガードなんだと……

テイオの記憶（後書き）

獣はグノーススの未完成品を大量に投与された子供という設定です
すぐに脆く消え去りますが、一時的に驚異的な身体的能力になると
しています

灰色のクロスベル（前書き）

ここらで穏やかな日常を入れようとネタを考えていたら時間がかかりました

そして、変な風に重くなっちゃいました

まともな日常が書きたい

ネタも欲しい、切実に

灰色のクロスベル

「どうして知らない振りをしたんですか？」

ティオがアルクエイドのことを思い出した日からすでに10日が経過していた。

「はあ、振りじゃない」

あれから毎日、ティオはアルクエイドにウォークスに乗せて貰った時に

否定されたことを問うていた。

「嘘です」

仕事がある日でもすぐに終わらせて、工房にいないときは街中から見つけ出す。

今日もまた、百貨店の前で出会ってしまった。

今回はいつもと違い、ロイドたち支援課のメンバーが揃っていた。

「今日は一段と絡むわね」

毎度の如く、ウォークスの後ろに乗っているレンが言う。

もはやこの遣り取りも珍しいことではなくなっていた。

止めても聞かないティオにロイドたちに対処法はなかった。

ティオが居なくなったときに何があったかよく知らない彼らは戸惑うしかなかった。

けれど、それでもこの光景を幾度と見ていれば慣れもする。

すでにランディは面白そうに笑っているし、エリイは微笑ましそう

に見ている。

ロイドに至っては苦笑するしかない。

「だから覚えていないと言っているだろう」

「絶対嘘です」

もう何度繰り返されたか分からない不毛な遣り取りが続けられている。

「それより、貴方達は今日はどうしたの？」

「今日は休日ついでに街のパトロールでもしようと思ってな」

「パトロール？」

支援課からパトロールと聞いてアルクエイドは眉を潜めた。

「死神対策なんですよ」

「無駄なことを」

「何も知らないからでしょ」

レンの言葉にアルクエイドは呆れながらも言うとすぐさま反論された。

「教えるわけにもいかんしな」

「一般人が襲われる可能性が無いのが救いかしらね」

今の支援課では敵うどころか出会うことさえ無いだろうと判断しての言葉だった。

「そっちは何の用なんだ？」

「今日はアルとデートなの」

そう言ってレンはアルクエイドの背後から抱きついた。

その言葉に支援課のメンバーの反応は様々だった。

ロイドは苦笑し、エリィは微笑ましそうに笑い、ランディは冷やかしていた。

ティオは先程からずっとアルクエイドに問いただしている。

「食料が切れてな、補充ついでに外食だ」

レンの言葉に呆れながらもアルクエイドは訂正する。

「男女が一緒に外食して買い物したら立派なデートじゃない」

「あーはいはい、そうだな」

その言葉にレンが頬を含まらせて文句を言うがアルクエイドは面倒くさそうに顔を背けて言った。

「というか、休日まで自ら仕事とはご苦労なことだな」

「本当だぜ、せっかく今日はナンパでもしようと思っていたのによ」

「だから今日は有志でと言ったじゃないか」

「ロイドだけじゃなく、お嬢やティオ助まで行くんなら俺だけ遊ぶわけにもいかんだろう」

「ランディさんは普段は不真面目振ってるくせにこっぴどい時はついてくるんですね」

ランディの言葉にティオはあからさまに溜め息をついて言う。

「おーおー、そういう事言うのはこの口かあ？」

「い、いひゃいです」

ランディはティオの頬を思いつきり引つ張る。

「仲が良いわね」

「レンちゃんたちと比べたらまだまださ」

「当然よ」

「……………」

何故自分に懐いているのか分からないアルクエイドは溜め息をつくしかなかった。

「そうだ、丁度昼時だし、一緒に食べに行きませんか？」

「別に構わないが」

「みんなはどうだ？」

「そうね、いいんじゃないかしら」

「俺も賛成だ」

「構いません」

アルクエイドの返事に少し悩んでいた支援課のメンバーは頷いた。アルクエイドたちが最初に予定していたという飲食店を目指して、一同は東通りへと向かった。

アルクエイドたちは東通りにある飲食店、龍老飯店にやってきた。各々が好きな注文をし、それが運ばれてくるのを待っていた。

「そういえば此处に来るのは久しぶりですね」

「不良たちの時以来だな」

「ここのは香辛料が多くて刺激が強いんだよな」

「ここを選んだのはどっちのリクエストなんですか？」

「アルよ、アルはこの料理が好きなのよ」

「好きというか、東方系の料理が舌に馴染むんだよ」

「へえ、俺も好きだが馴染むって感じじゃないなあ。
旨いんだけど刺激が強いんだよな」

「出身の違いだろうな」

「ということは東方出身ですか？」

「恐らくな」

「恐らく？」

「小さい時のことは覚えてないんだよ。
そこで拾ったと言われたからそうだと思うんだが……」

「拾われた？」

「傷だらけで倒れてたんだとよ」

「それは……」

アルクエイドの言葉に支援課のメンバーは沈黙してしまった。
聞いてはいけないことを聞いてしまったような神妙な顔をしていた。

「覚えてないから気にしないでくれ。」

親がない奴らなんて世界にいくらでもいる」

「そういう問題じゃないでしょ、アル」

「他人の当たり前は自分の当たり前じゃないってことさ」

そう言つてアルクェイドは急に真面目な顔をした。

「ところでお前たちに聞きたいことがあつたんだが」

「な、何でしょうか？」

態度の変わったアルクェイドに戸惑いながらもロイドたちも真面目な顔をした。

「クロスベルというこの場所をどう思う？」

「クロスベルを？」

「特務支援課と変えてもいい、どう思っている？」

「……………」

「そう難しく考えなくていい、色で答えてくれてもいい」

「色、ですか…………」

ロイドは目を閉じて少し考えてみた。

「黒、ですかね」

「その真意は？」

「色々な思惑が渦巻いていて、混じり濁っているからです」

「混ぜられているから黒……か」

アルクエイドはロイドの言葉に何度も頷いて頭に反芻する。

「俺の考えは灰色だ」

「灰色、ですか」

「ああ、正義も、慈悲も、寛容も、悪も、善も、欲も、思想も、意志も、何もかもが混ぜられている。

だから何にも成れず、透き通らずに灰色なんだ。

黒でも白でもない、何かの答えを出す前に新たな色が混ぜって新たな問題が現れてしまう。

そういう場所なんだよ、クロスベルはな」

「……………」

その言葉にロイドたちは何も言えなかった。

暗に言われているのだ、これから何かが起こるということ……

その事実、そのことを知っていることを不思議に思った。

「そう構えるな、気楽にしていればいいさ」

小声で今はなと最後に呟いたが彼らに聞こえることはなかった。

その後、運ばれてきた料理の味が分からないくらい、彼らは考えて

しまっていた。

アルクエイドに言われた真意が知りたくて……

先程まで変わって、昼食宙は至って静かになってしまっていた。

「本当に性格が悪いわね」

敢えて複雑に考えさせるアルクエイドに視線を向けながら、レンは呆れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5147y/>

英雄伝説 - 刹那の軌跡 -

2011年12月2日14時59分発行